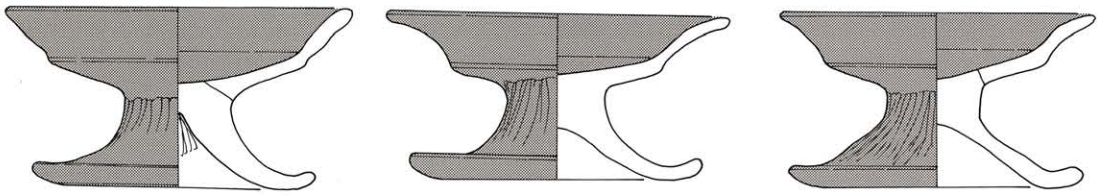
稲敷市埋蔵文化財調査報告書第１集

茨城県稲敷市

根崎遺跡発掘調査報告書



平成18年3月
稲敷市教育委員会
有限会社　マキヤ緑化土木
有限会社　日考研茨城

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第１集

茨城県稲敷市

根崎遺跡発掘調査報告書

平成18年3月
稲敷市教育委員会
有限会社　マキヤ緑化土木
有限会社　日考研茨城

序　文

稲敷市は平成17年3月22日に、江戸崎町・新利根町・桜川村・東町の4町村が合併して誕生しました。人口約49,600人面積178,12㎢東西約23㎞・南北約14㎞あります。

本地域は、歴史的にみて土岐氏や佐竹氏の領地となるなど、共通の歴史を有しているほか、常陸の国と下総の国の境に位置していたため、双方の文化の交差点となっていました。

このたび報告されましたのは、（有）マキヤ緑化土木が日考研茨城に委託して調査いたしました根崎遺跡の発掘調査です。

その中でも今回の根崎遺跡は江戸崎地区です。江戸崎地区は埋蔵文化財包蔵地が多いところです。根崎遺跡は北東側に舌状に張り出す、標高15m前後の台地上に立地し、集落跡で時代は縄文時代から古墳時代後期のものと思われます。

埋蔵文化財の保護というのはとても難しい問題です。遺跡の話題が盛んに報道される今日、人々の歴史への関心は高まりつつあるものと感じています。

歴史や文化財によりいっそうの理解と関心をもっていただくための一助として、本書が広く活用されることを念願いたします。

末尾になりましたが、本書が稲敷市の貴重な文化財史料として刊行に至ることができましたのも、関係各位の御協力によるものと存じています。

心から感謝申し上げます。

平成18年3月

稲敷市教育委員会

教育長　田中弘一

例　　言

1．本書は、有限会社マキヤ緑化土木（代表取締役　鈴木克己）による山砂採取事業に伴い、開発行為前の事前調査として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、下記の遺跡を収録したものである。
茨城県稲敷市蒲ヶ山字根崎1148-3に所在する根崎(ねさき)遺跡である。

3．調査は有限会社マキヤ緑化土木の委託を受けて、茨城県教育委員会および稲敷市教育委員会の指導のもとに、有限会社日考研茨城が下記の期間に実施した。
平成17年8月1日～平成17年8月19日（本調査）
平成18年１月20日～平成18年３月20日（整理作業）

4．発掘調査組織は下記の通りである。
調査担当者　大渕　淳志　（日本考古学協会員　㈲日考研茨城）
整理作業は、稲敷市教育委員会の指導のもと、小川和博　大渕淳志　遠藤啓子　大渕由紀子　大野美佳　小川知美（㈲日考研茨城）が行った。

5．本書の編集は、小川和博・大渕淳志が行った。

6．本書に使用した地形図は下記のとおりである。
第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図（江戸崎）
第２図　稲敷市役所発行　1/2,500地形図

7．本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

8．本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

9．基本土層および遺構土層図（セクション）・横断面図（エレベーション）の左上に記載した数値は標高を表示している。また遺構の規模については現遺構確認面から底面までの高さを計測した数値を表示している。

10．遺構・遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。

11．記録および出土遺物は、稲敷市教育委員会が保管している。

12．発掘調査および本報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）
茨城県教育委員会、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、諸星政得、鈴木美治、赤井博之、白石真理、稲田健一

13．各調査には以下の者が参加した。
海老原龍生　　海老原すゑ　小野豊　大塚みつい　佐賀剛　佐賀実　中島秀雄　中島トミ子　中島貞雄　谷中昌　沼野富士雄　　沼野ゆきえ

14．遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。
住居跡：ＳＩ　土坑：ＳＫ　柱穴：Ｐ　撹乱：Ｋ

目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　序章 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過と概要 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 1
　第４節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
　　１　遺跡の位置 …… 1
　　２　周辺の遺跡 …… 2
第Ⅱ章　根崎遺跡の調査 …… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　第２節　発見された遺構と遺物 …… 6
　　第１項　縄文時代 …… 6
　　１）屋外炉跡ＳＦ01 …… 6
　　２）土坑ＳＫ01 …… 7
　　３）遺構外出土の縄文土器 …… 9
　　第２項　古墳時代 …… 9
　　１）住居跡ＳＩ01 …… 9
　　２）住居跡ＳＩ02 …… 14
　　３）住居跡ＳＩ03 …… 14
　　４）住居跡ＳＩ04 …… 17
　　５）住居跡ＳＩ05 …… 19
　　６）住居跡ＳＩ06 …… 23
　第Ⅲ章　まとめ …… 27
　付章　根崎遺跡出土土器観察表 …… 29

挿図目次

第１図　根崎遺跡の周辺地形図（1：2500）
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25000）
第３図　根崎遺跡遺構配置図
第４図　屋外炉跡ＳＦ01および土坑ＳＫ01実測図
第５図　屋外炉跡ＳＦ01および土坑ＳＫ01出土縄文土器
第６図　遺構外出土の縄文土器
第７図　住居跡ＳＩ01実測図

第８図　住居跡ＳＩ01カマド実測図
第９図　住居跡ＳＩ01出土遺物（1）
第10図　住居跡ＳＩ01出土遺物（2）
第11図　住居跡ＳＩ02実測図
第12図　住居跡ＳＩ02出土遺物
第13図　住居跡ＳＩ03実測図（1）
第14図　住居跡ＳＩ03実測図（2）
第15図　住居跡ＳＩ03カマド実測図
第16図　住居跡ＳＩ03出土遺物
第17図　住居跡ＳＩ04実測図
第18図　住居跡ＳＩ04カマド実測図
第19図　住居跡ＳＩ04出土遺物
第20図　住居跡ＳＩ05実測図
第21図　住居跡ＳＩ05カマド実測図
第22図　住居跡ＳＩ05出土遺物（1）
第23図　住居跡ＳＩ05出土遺物（2）
第24図　住居跡ＳＩ06実測図
第25図　住居跡ＳＩ06カマド実測図
第26図　住居跡ＳＩ06出土遺物

写真図版目次

PL.1　根崎遺跡遠景　根崎遺跡調査前　根崎遺跡全景
PL.2　住居跡ＳＩ01全景　住居跡ＳＩ01カマド　住居跡ＳＩ01遺物出土状況
PL.3　住居跡ＳＩ02全景　住居跡ＳＩ02遺物出土状況　住居跡ＳＩ02貯蔵穴１
PL.4　住居跡ＳＩ03全景　住居跡ＳＩ03遺物出土状況
PL.5　住居跡ＳＩ04全景　住居跡ＳＩ04遺物出土状況
PL.6　住居跡ＳＩ05全景　住居跡ＳＩ05遺物出土状況
PL.7　住居跡ＳＩ06全景　住居跡ＳＩ06遺物出土状況
PL.8　住居跡ＳＩ03全景　住居跡ＳＩ03遺物出土状況
PL.9　住居跡ＳＩ01出土遺物　住居跡ＳＩ02出土遺物
PL.10　住居跡ＳＩ02出土遺物
PL.11　住居跡ＳＩ02出土遺物　住居跡ＳＩ03出土遺物

表目次

Tab.1　根崎遺跡と周辺遺跡一覧表

第Ⅰ章　序　章

第１節　調査に至る経緯

平成15年12月、（有）マキヤ緑化土木より稲敷市浦ヶ山字根崎1145番1外11筆の埋蔵文化財の所在の有無について照会があった。山砂採取として28804,53㎡を開発する内容であった。

近くに、登録されている遺跡はありませんでしたが、平成16年1月現地踏査の結果、その中の浦ヶ山字根崎1147番地に、いくつかの土器や破片が採取された。その後、山林であるため樹木の伐採後、平成16年7月試掘調査を行い調査はトレンチ方式で実施した。

その結果、縄文・古墳時代（後期）の竪穴住居跡3軒、土坑2基が確認され、縄文土器片、古墳時代後期の土師器片が出土したので、教育委員会と事業主、開発業者との間で話し合いが行われ、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することで合意し、約400㎡の発掘調査が平成17年8月1日～平成17年8月19日に実施された。

（稲敷市教育委員会）

第２節　調査経過とその概要

根崎遺跡の本調査は、平成17年8月1日から8月19日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発予定部分にあたる400㎡を調査することができた。

すでに表土除去が終了しており、竪穴住居跡６軒が把握されていた。さっそく正確な遺構精査を実施し、精査終了後、セックションベルトを設定し、遺構床土除去を開始する。まず南端を１号住居跡（ＳＩ01）と命名し、以下時計回りに２号住居跡（ＳＩ02）、３号住居跡（ＳＩ03）と命名する。これら３軒はいずれも山砂採取工事により一部消滅していた。また調査区中央部で確認された３軒は南北に並び南から４号住居跡（ＳＩ04）、５号住居跡（ＳＩ05）、６号住居跡（ＳＩ06）と命名し、すべて完掘することができたが、それぞれ北側の一部が重複する状態で検出された。最後に住居跡群の周囲を精査していくと土坑の存在が明らかになった。縄文時代前期の屋外炉跡１基（ＳＦ01）と土坑１基（ＳＫ01）を検出し、調査を終了する。

（小川和博）

第３節　調査日誌

2005年8月1日～8月19日

8.01　本日より調査を開始する。発掘機材搬入。遺構検出作業（1号住居跡（ＳＩ01））
8.02　遺構検出作業（1号住居跡・2号住居跡（ＳＩ01・02））
8.03　遺構検出作業（2号住居跡～4号住居跡（ＳＩ02～04））
8.05　遺構検出作業（4号住居跡・5号住居跡（ＳＩ04・05））
8.08　遺構検出作業（5号住居跡・6号住居跡（ＳＩ05・06））午後よりセクション図実測作業。
8.10　平面図実測作業。
8.11　カマド　平面図・エレヴェーション図実測作業。2号住居跡・3号住居跡（ＳＩ02・03）床除去作業
8.17　カマド検出作業。セクション図・平面図・エレヴェーション図実測作業。
8.18　3号住居跡～6号住居跡（ＳＩ03～06）貼床除去作業。
8.19　1号住居跡・4号住居跡・5号住居跡（ＳＩ01・04・05）貼床除去作業。平面図。写真撮影。機材搬出。現地作業終了する。

（大渕淳志）

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡

１．遺跡の位置

根崎遺跡は、北緯35°57′1″、東経140°17′13″の茨城県南端、稲敷市蒲ヶ山字下ノ内1147番地に所在し、旧江戸崎町の市街地から西に3.5kmに位置する。ここは常総台地北東部に相当し、通称稲敷台地縁辺部に形成され

た低段丘上にあたる。付近は南側が龍ヶ崎市と境する１級河川小野川や桂川、乙戸川をはじめその支流によって侵食され複雑な地形を呈しているが、ここも外見上長靴状の支台が南東にある霞ヶ浦方向に向かって延びている。なお遺跡は小野川の反対側で、やはり小野川の支流にあたる沼里川によって開析された比較的幅狭い支谷に面している。周囲は標高25m以上の洪積台地が展開しているが、ここは標高26mの高位面から東側の沼里川に向かって突出する先端部で、標高わずか13mの平坦面の少ない緩傾斜部に遺跡が立地している。標高は最高位で13.8mを測り、わずか100m西側の高位面との比高差は13mを測り、また低位面である現水田との比高差はわずかに５mである。

なお、本遺跡の西100mの標高26mの洪積台地上には弥生時代、古墳時代の集落である下ノ内遺跡が位置する。現況は山砂採取により台地が分断されているが、本来は地続きであり、同一遺跡と推定される。

２．周辺の遺跡

現在旧江戸崎町で周知されている遺跡は164ヶ所である。10年前まで52ヶ所といわれていたものが３倍以上所在することが確認されている。この数字は調査が進めばさらに増えることは間違いない。事実今回の「根崎遺跡」やこれから調査予定の「下ノ内遺跡(164)」は開発行為が申請されてから試掘調査の結果、遺跡であることが判明したものである。なお、周辺には明治時代より知られた著名な遺跡が多く、とくに縄文時代の貝塚については学史的にみても特筆されるものがある。「椎塚貝塚(024)」「小松川貝塚(020)」「センゲン貝塚(033＝湮滅)」、「村田貝塚(06)」等は戦後になっても慶応大学や早稲田大学で学術調査されているものがある。

さて、根崎遺跡が立地する小野川および沼里川に挟まれた稲敷台地の支台である奥原台地上には縄文時代から近世に至るまでの多くの遺跡が確認されているが、とくに縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が集中している。しかし、実態は発掘調査が行われている遺跡は平成３年に実施された「土戸古墳(046)」と昨年調査した「下ノ内遺跡(164)」以外はなく、いずれも先に実施された分布調査の成果によるものである。まず旧石器時代は少なく、立地する台地が異なるが平成４年にゴルフ場造成に先行して調査された「秋平遺跡(056)」でナイフ形石器が出土している。

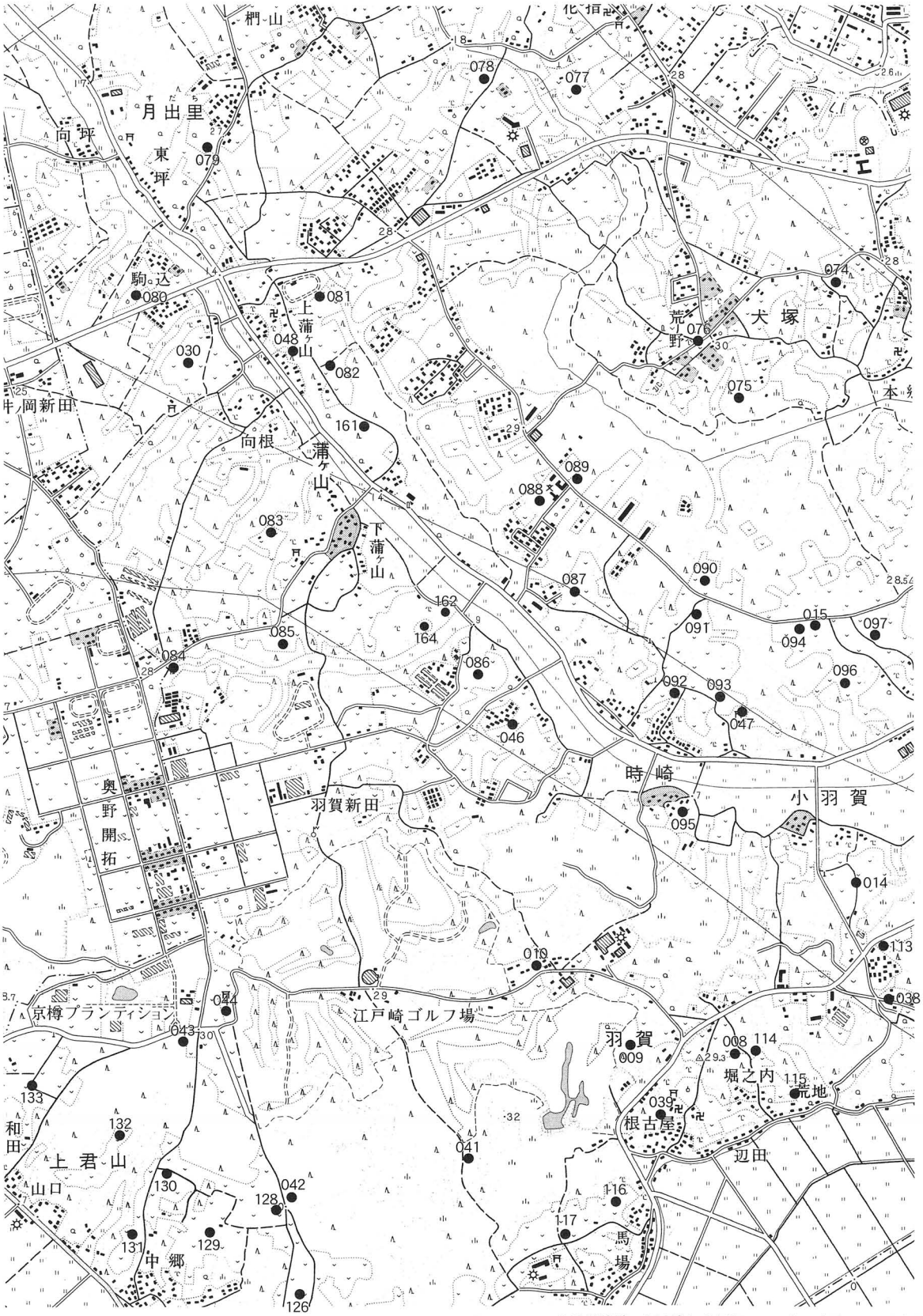
次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺でも「神田道貝塚(014)」「蒲ヶ山貝塚(030)」をはじめ、「後谷遺跡(083)」「原内遺跡(085)」「土戸平遺跡(086)」が知られ、「根崎遺跡(162)」では早期・井草式期から前期終末までの遺物が出土している。またあいにくここでは図示できないが、縄文時代中期の貝塚である「「村田貝塚(006)」も同台地上に立地している。

弥生時代は極端に少なくなる。旧町内でも10ヶ所が知られているのみで、集落跡でも盾の台古墳群(022)、大日山古墳群(051)、思川遺跡(053)、秋平遺跡(056)が調査されたに過ぎない。周囲でも「立通し遺跡(088)」が対峙する台地上に立地するのみである。しかし、隣接する「下ノ内遺跡(164)」では弥生時代中期末葉の住居跡が検出され、また遺物だけであるが、本遺跡でも後期の土器が出土している。

古墳時代になると古墳をはじめ、集落跡も数多く報告されている。ここでも検出された６軒すべてが古墳時代の住居跡であり、周辺でも第２図に示した分布図内で半分以上の28ヶ所が所在する。隣接する「下ノ内遺跡(164)」でも検出された２軒の住居跡は古墳時代中期と後期に属しており、これは本遺跡でも確認されており、両遺跡間における親密な関連性が指摘され、同一遺跡であることの傍証しなろう。また古墳では平成３年に調査された「土戸古墳(046)」のほか、「大日古墳(038)」「大日峯古墳(041)」「山王古墳(042)」「大塚古墳(043)」「沼口古墳群(044)」「東前古墳群(047)」「辺田台古墳(048)」が所在する。

次ぎの奈良・平安時代の遺跡としては同台地の南端に位置する「下君山廃寺(012)」がある。布目瓦が多量に出土し、塔の心礎と想定される平石の存在が明らかにされている。しかも８世紀代の金剛仏の出土も報告されており、「信太郡」の郡衙の推定地として明治時代より指摘されている。また昭和63年に県道新川江戸崎線の道路改良工事に伴い調査された「二の宮貝塚(032)」および「思川遺跡(053)」では集落内から土師器・須恵器のほか、灰釉陶器の平瓶、把手付瓶、緑釉陶器の輪花、さらに唐鏡（端花双鳳鏡）の破片の出土が報告されている。これらを総合的

第１図　根崎遺跡周辺地形図（1：2500）



162根崎遺跡　008荒地古墳　009木納場古墳群　010大塚古墳　014神田道具塚　015自穢前遺跡　030浦ケ山貝塚　038大日古墳　039羽賀城跡　041大日峯古墳　042山王古墳　043大塚古墳　044沼口古墳群　046土戸古墳　047東前古墳群　048辺田台古墳　074八幡台遺跡　075大門遺跡　076荒野遺跡　077芝ケ谷遺跡　078花指遺跡　079新畑塚　080権現遺跡　081辺田平遺跡　082　中部遺跡　083後谷遺跡　084上ヲモ子塚　085　原内遺跡　086土戸平遺跡　08赤羽根遺跡　088立通し遺跡　089二重堀遺跡　090赤羽根塚　091原久保遺跡　092時崎平遺跡　093宮後遺跡　094沼田庚申塚　095神明平遺跡　096塚本遺跡　097中道遺跡　113山後遺跡　114高野遺跡　115荒地平古墳　116観音前遺跡　117池台遺跡　126原ノ前遺跡　128上君山栗山遺跡　129中根台遺跡　130根古ヤ台遺跡　131根古ヤ遺跡　132岡平遺跡　133和田遺跡　164下ノ内遺跡

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25000）

にみるとこの地が霞ヶ浦の肥沃な土地を背景に、政治的にも中心的な機能をもたらしていたことは疑いない。

（小川和博）

参考文献

西村正衛1981「茨城県江戸崎町村田貝塚（第一次調査）

鈴木美治1991「二の宮貝塚・大日山古墳・思川遺跡－一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財報告第65集

茨城県立歴史館1994「学術調査報告書．４．茨城における古代瓦の研究」

茨城県1995「茨城県・考古資料編・奈良平安時代」

大賀　健他1999「秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚」江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会

Tab. 1　根崎遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種　別	遺　物	備　考
162	根崎遺跡	集落跡	古墳	2005年調査
008	荒地古墳	古墳	古墳	
009	木納場古墳群	古墳群	古墳	
010	大塚古墳	古墳	古墳	
014	神田道具塚	包蔵地・貝塚	縄文	
015	自穢前遺跡	包蔵地・古墳	古墳・奈平・中世	
030	浦ヶ山貝塚	包蔵地	縄文	
038	大日古墳	古墳	古墳	
039	羽賀城跡	城館跡	中世	
041	大日峯古墳	古墳	古墳	
042	山王古墳	古墳	古墳	
043	大塚古墳	古墳	古墳	
044	沼口古墳群	古墳群	古墳	
046	土戸古墳	古墳・集落	縄文・古墳・奈平	
047	東前古墳群	古墳群	古墳	
048	辺田台古墳	古墳	古墳	
074	八幡台遺跡	包蔵地	縄文	
075	大門遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
076	荒野遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
077	芝ヶ谷遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
078	花指遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
079	新畑塚	塚	近世	
080	権見遺跡	包蔵地	古墳・奈平	
081	辺田平遺跡	包蔵地	奈平	
082	中部遺跡	包蔵地・貝塚	縄文・中世	
083	後谷遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
084	上ヲモ子塚	塚	近世	
085	原内遺跡	包蔵地	縄文・奈平・中世	
086	土戸平遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
087	赤羽根遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
088	立通り遺跡	包蔵地	縄文・弥生	
089	二重堀遺跡	防塁	中世	
090	赤羽根塚	塚	近世	
091	原久保遺跡	包蔵地	古墳	
092	時崎平遺跡	包蔵地・貝塚	古墳	
093	宮後遺跡	包蔵地	古墳	
094	沼田庚申塚	塚	近世	
095	神明平遺跡	包蔵地	古墳	
096	塚本遺跡	包蔵地・古墳群	弥生・古墳・奈平	
097	中道遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈平・中世	
113	山後遺跡	防塁	中世	
114	高野遺跡	墓地	中世	
115	荒地平古墳	古墳	古墳	
116	観音前遺跡	包蔵地	奈平・中世	
117	池台遺跡	包蔵地	縄文・奈平・中世	
126	原ノ前遺跡	包蔵地	奈平・近世	
128	上君山栗山遺跡	包蔵地	奈平	
129	中根台遺跡	包蔵地	古墳・奈平	
130	根古ヤ台遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
131	根古ヤ遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈平	
132	岡平遺跡	包蔵地	奈平	
133	和田遺跡	包蔵地	奈平	
164	下ノ内遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	2005年調査

第Ⅱ章　根崎遺跡の調査

第１節　調査の概要

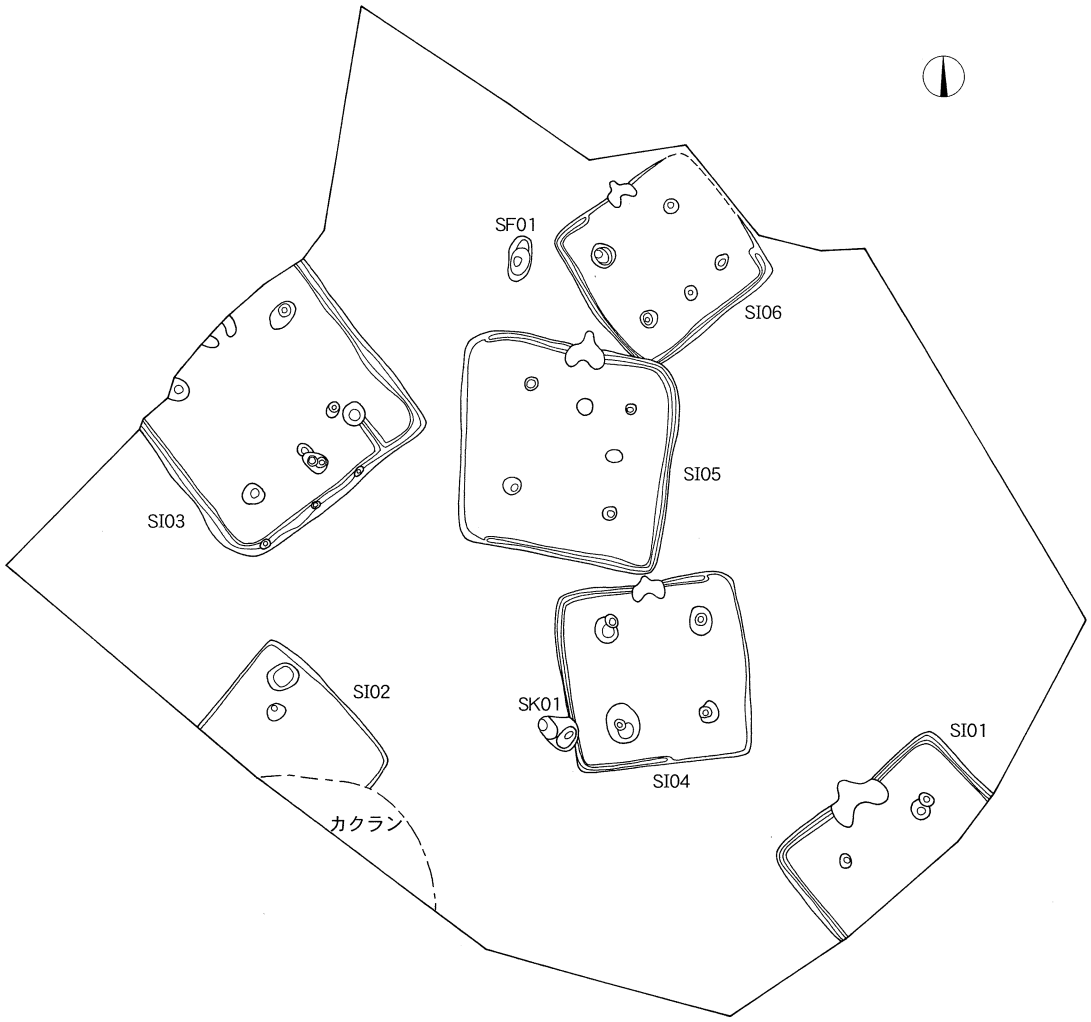
本調査は、すでに表土層除去が終了しており、遺構が露出していた。そのため確認されている６軒の竪穴住居跡の所在する400㎡すべてが調査対象となった。しかし、１号住居跡（以下ＳＩ01とする）から３号住居跡（ＳＩ03）まではすでに山砂採取工事の際一部が破壊されて完全な形では調査ができなかったものの、４号住居跡（ＳＩ04）から６号住居跡（ＳＩ06）は完存しており十分な調査が可能であった。そのほか住居跡群周囲精査の結果縄文時代前期末葉の屋外炉跡１基、土坑１基が検出された。なお、完存していたＳＩ04からＳＩ06の３軒はわずかに重複しながら存立しており、また住居跡覆土から土師器や須恵器をはじめ石製模造品や土玉など比較的まとまった資料を提出している。その他縄文時代の屋外炉跡および土坑からわずかであるが遺物の出土があった。

第２節　発見された遺構と遺物

第１項　縄文時代

１）屋外炉跡ＳＦ01（第４・５図）

調査区の北側で検出された屋外炉跡である。確認された規模は長軸であるで南北1.14m、短軸である東西0.62m、



第３図　根崎遺跡遺構配置図

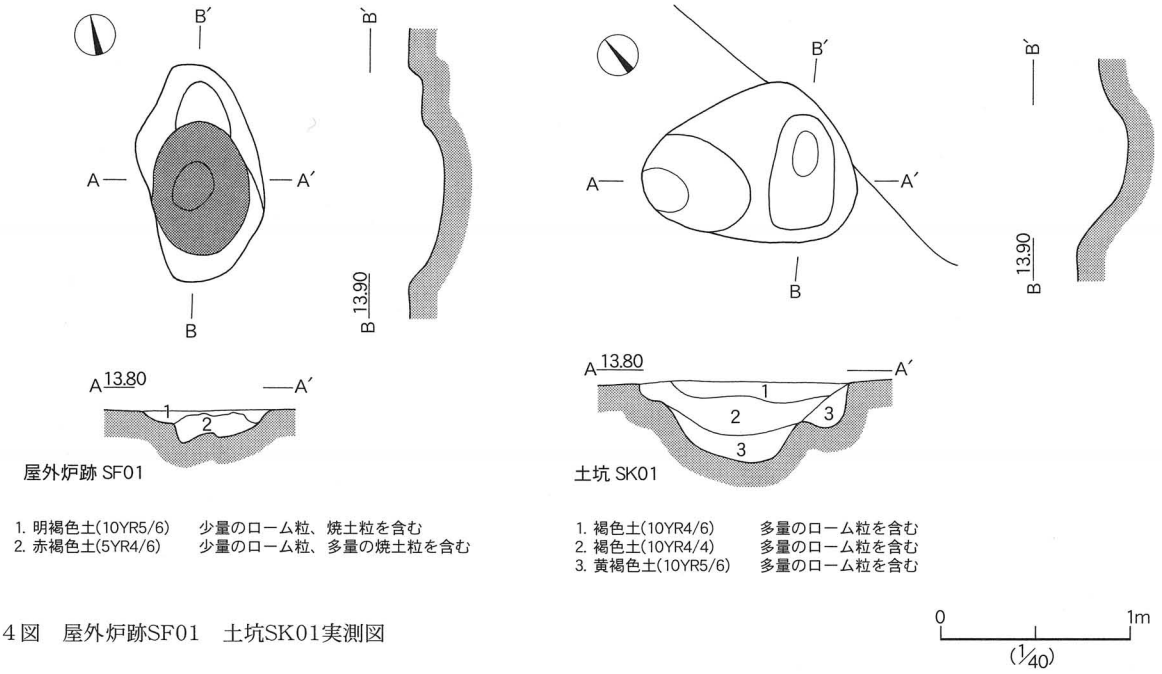
0　5m
(1/200)

深さ0.17mで、平面形は楕円形を呈している。長軸の傾きはN－17°－Wを指す。床面は鍋底状を呈し、燃焼部は南側に位置し、長軸81cm、短軸52cmの楕円形で、底面には火熱による赤化硬化をなしている。覆土は２層に分層でき、覆土上面は１層明褐色土でローム粒子と焼土粒を僅かに含み、底面を覆っている２層赤褐色土は僅かなローム粒と多量の焼土粒を含み、締りがあり、粘性に欠ける。

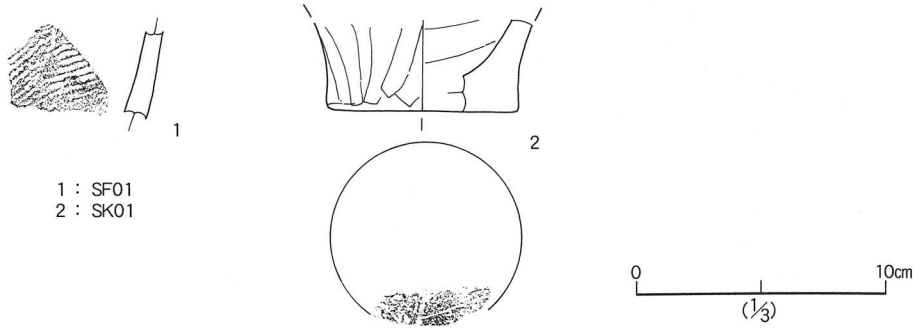
覆土中から小破片である縄文時代前期末葉の土器が１点出土している。第５図１は深鉢の胴部破片。無節Ｒを地文とする。胎土に石英・長石粒を含み、色調は黄橙色(10ＹＲ8/6)を呈する。

２）土坑ＳＫ01（第４・５図）

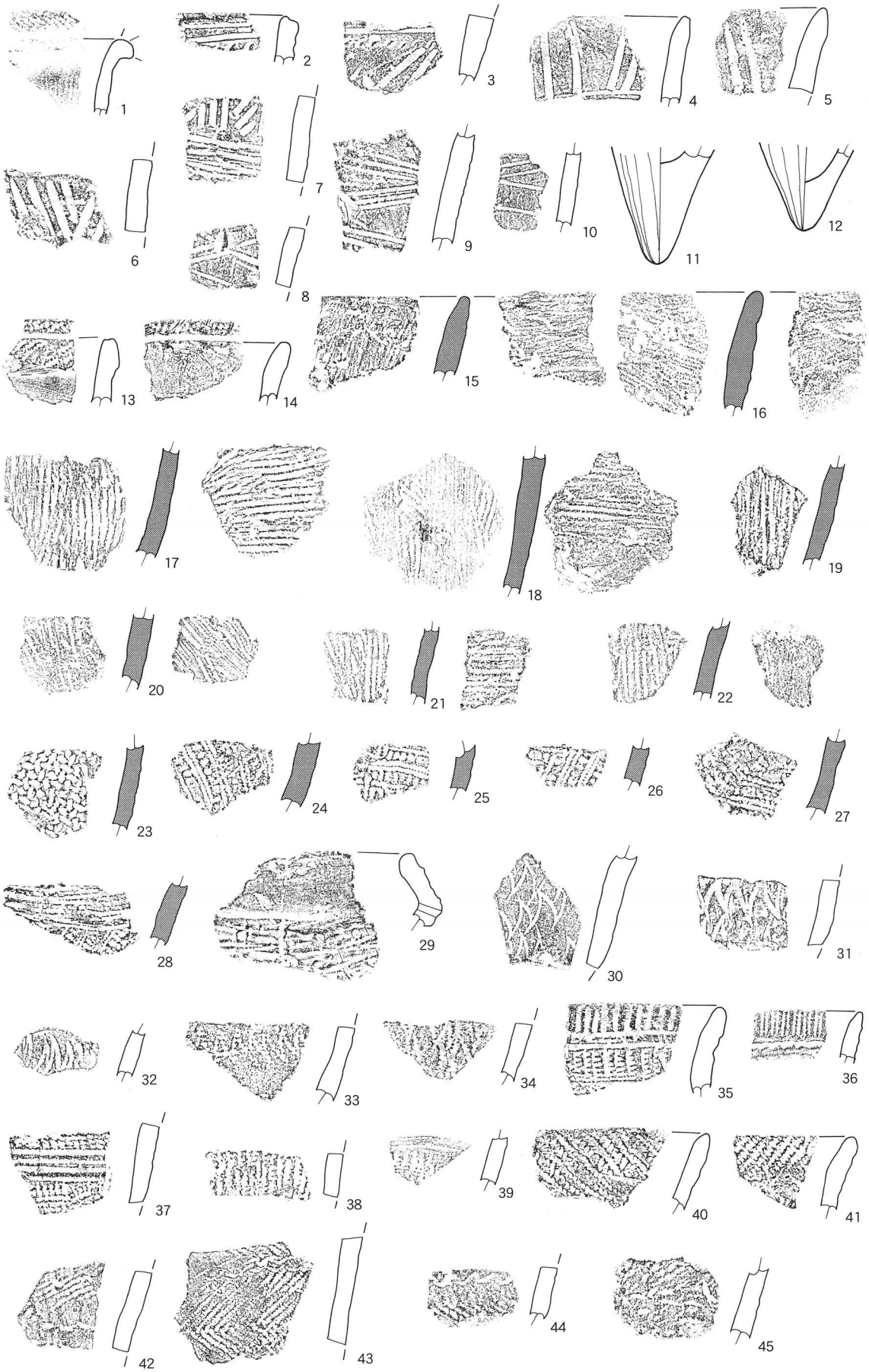
調査区の中央南側の住居跡ＳＩ04南西壁際に切られている。平面形態は卵形を呈する楕円形で、規模は上面長



第４図　屋外炉跡SF01　土坑SK01実測図



第５図　屋外炉跡SF01および土坑SK01出土縄文土器



第6図　遺構外出土の縄文土器

軸にあたる南北軸で113cm、短軸の東西軸85cm。主軸方位はN－53°－Wを指す。底面は起伏にとみ、鍋底状の掘形が２ヶ所みられ、北側掘形は長軸68cm、短軸で46cm、深さ37cm。南掘形は長軸65cm、短軸で36cm、深さ24cmを測る。壁面は底面から緩傾斜気味に立ち上がる。

覆土は３層に分層でき、上層の1層はローム粒子を多量に含む褐色土。覆土中層の２層はローム粒子を多量に含む褐色土。底面に堆積した３層黄褐色土はローム粒子を多量に含む黄褐色土である。

遺物として覆土中から深鉢底部破片が１点出土している。底径7.6cmを測り、底面は木葉痕が残置している。胎土に石英、黒色粒子、長石粒を含む。色調は明赤褐色(2.5ＹＲ5/8)を呈する。前期後半の土器と推定される。

３）遺構外出土の縄文土器（第６図）

屋外炉跡ＳＦ01および土坑ＳＫ01以外の包含層および住居跡覆土から縄文土器片が出土している。縄文早期と前期の土器片である。

ａ）早期の土器（１～21）

１は撚糸文系土器である。肥厚する口唇部は大きく外反し、口唇部上に原体が圧痕され、口唇直下は横ナデが施され、胴部は撚糸Ｌが施文される。井草Ｉ式。

２～12は沈線文系土器である。２・３は同一個体で太沈線に爪形文が施文されている。４～７は太沈線が施文されるもので、４・５は口縁部破片である。４は横位の太沈線による区画文に間隔を開けた縦位の太沈線文、５はやや斜行する縦方向の太沈線文が施文される。６は縦方向の鋸歯状文が施文される。７は横位と縦位および斜行する太沈線文による幾何学文。８～10は細沈線文が施文されたもので、８は幾何学文区画文中にアナダラ属の貝殻腹縁文が施文されている。９は幾何学文に縦位の短沈線文が施文される。11・12は天狗の鼻状を呈する底部破片である。田戸下層式。

13・14は貝殻条痕文系土器群の初頭にあたる子母口式土器である。13は肥厚する口縁部と口唇部に絡条体圧痕文が施文されている。14は口唇部に絡条体圧痕文が施文されている。

15～22は早期後半の条痕文系土器である。15・16は口縁部破片である。内外面に縦位、横位および斜位の条痕文が施される土器で、胎土中に繊維を含む。

ｂ）前期の土器（23～45）

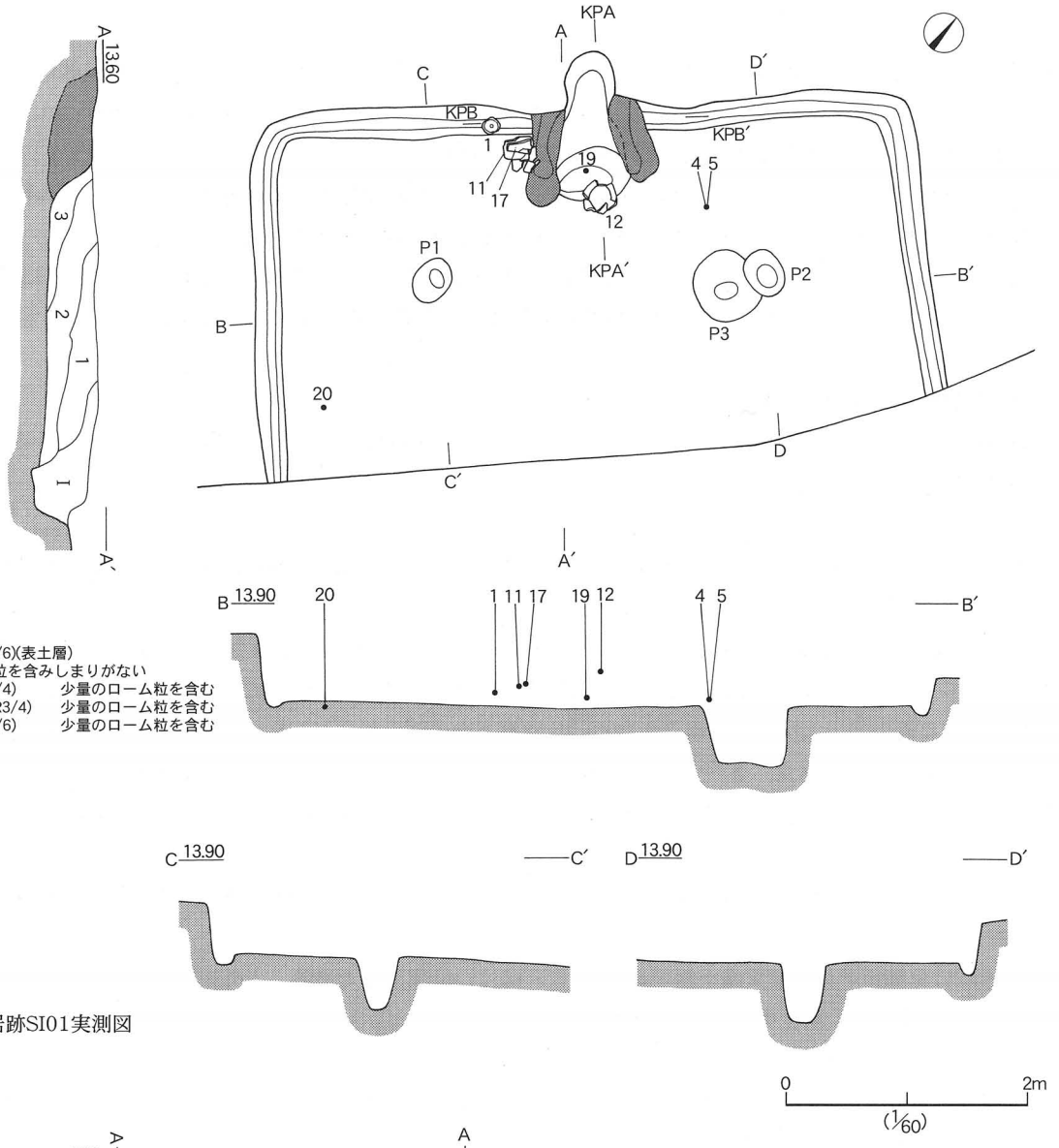
23～28は関山式土器である。23は４本組紐による施文。24～27は前々段合撚による縄文「異条縄文」が施文されている。また28は頸部に平行沈線が施されている。胎土に繊維を含む。

29はキャリパー状口縁を呈する有孔浅鉢である。口縁部を無文帯とし、頸部に刻目浮線文と円孔列が穿たれている諸磯b式。30～34は波状貝殻文が施文される浮島Ⅱ式。35～39は貝殻腹縁文に短条線帯をもつ興津式である。40～45は縄文施文の粟島台式。42～45は結節縄文が横位施文されている。

第２項　古墳時代

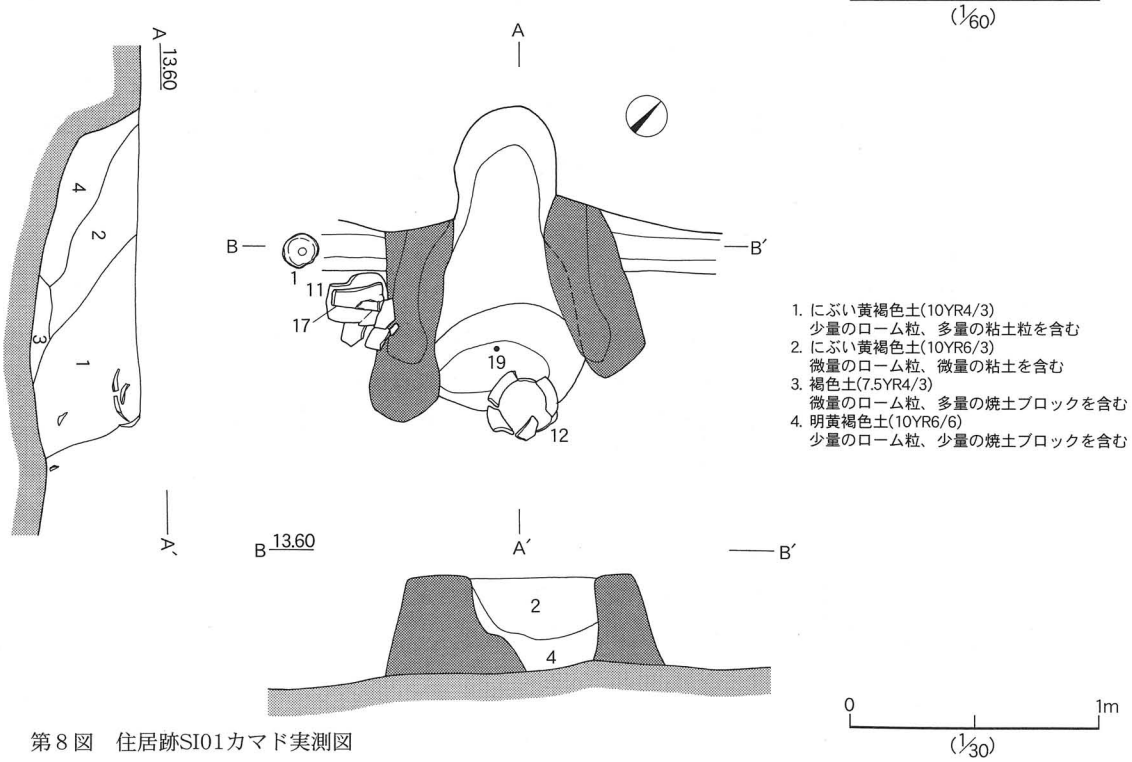
１）住居跡SI01（第７～10図）

調査区の南東端で検出された住居で、南東側約半分が大きく削平され、北西側のみ検出できた。確認された規模は中心軸で東西5.63m、南北3.00m、深さ0.24～0.55mで、平面形は方形を呈しているものと推定される。主軸は北西壁中央にカマドが設置しており、傾きはN－40°－Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著で全面硬化面が確認できる。壁溝はカマド部分を除き全周する。規模は上面幅で18～25cm、深さ4～8cmの横断面Ｕ字状を呈する。検出された主柱穴は２本で住居対角線上に設けたものであろう。なお、北側主柱穴は２本重複しており、南西側柱穴（Ｐ３）が古期で抜き取りされたものである。以下検出された柱穴の計測値である。



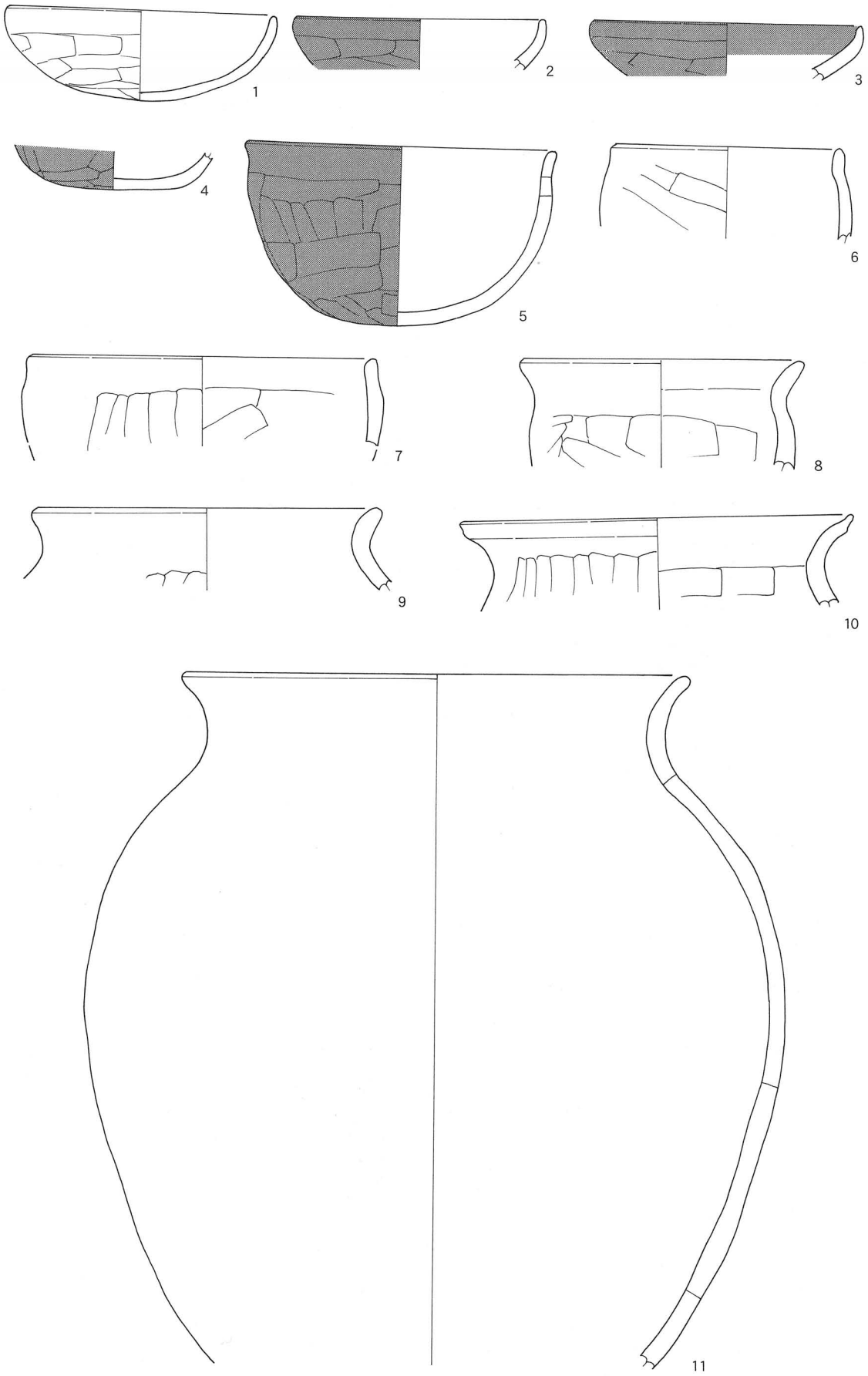
I 褐色土(10YR4/6)(表土層)
少量のローム粒を含みしまりがない
1. 褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒を含む
2. 暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒を含む
3. 褐色土(10YR4/6)　少量のローム粒を含む

第７図　住居跡SI01実測図

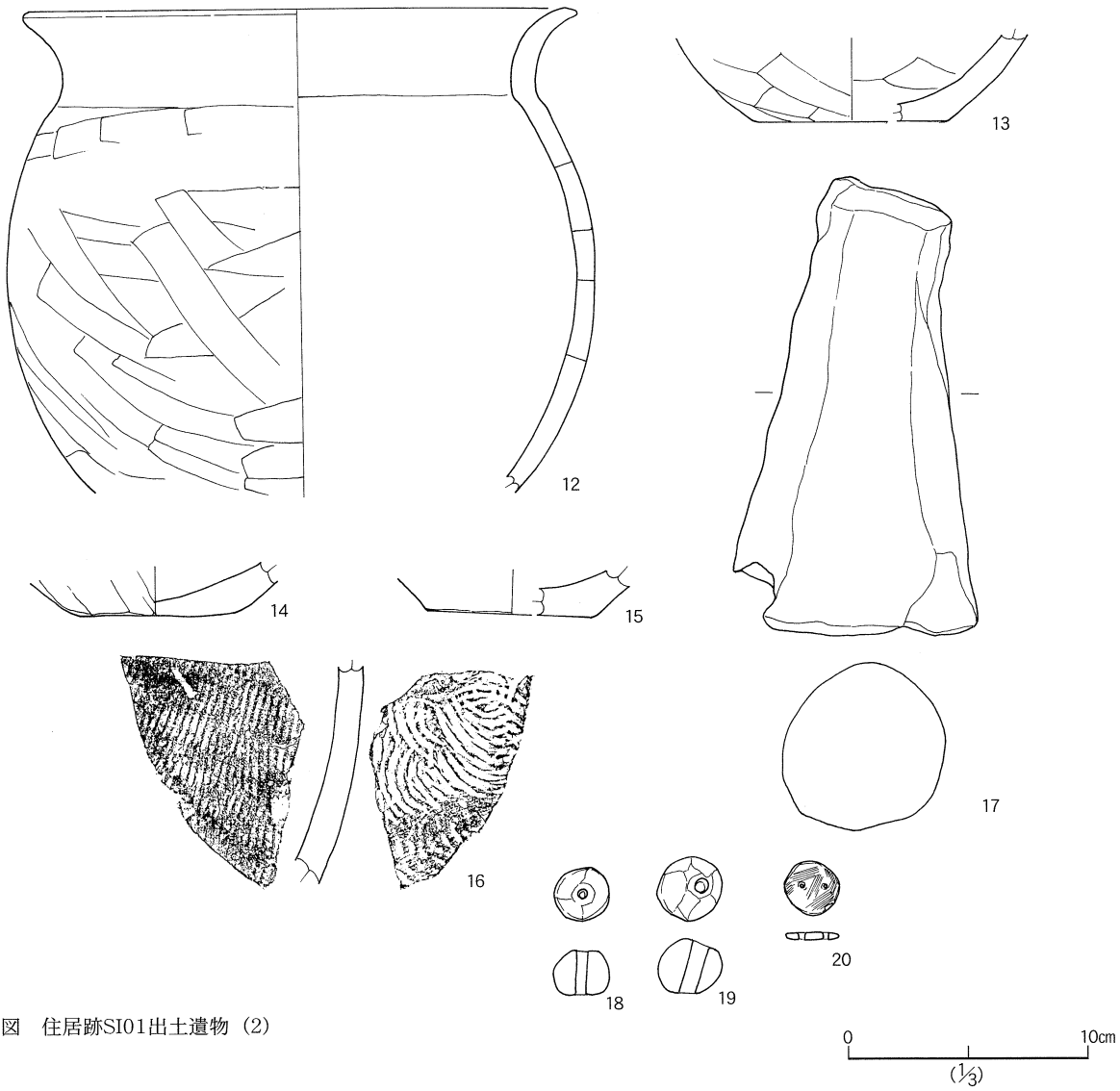


1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
少量のローム粒、多量の粘土粒を含む
2. にぶい黄褐色土(10YR6/3)
微量のローム粒、微量の粘土を含む
3. 褐色土(7.5YR4/3)
微量のローム粒、多量の焼土ブロックを含む
4. 明黄褐色土(10YR6/6)
少量のローム粒、少量の焼土ブロックを含む

第８図　住居跡SI01カマド実測図



第９図　住居跡SI01出土遺物（1）



第10図　住居跡SI01出土遺物（2）

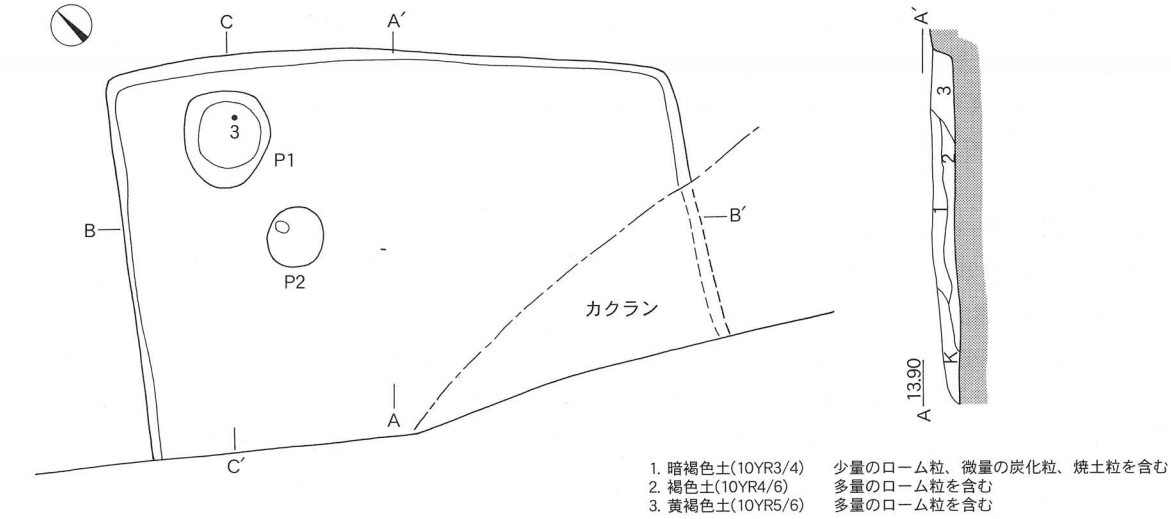
柱穴計測値（cm）

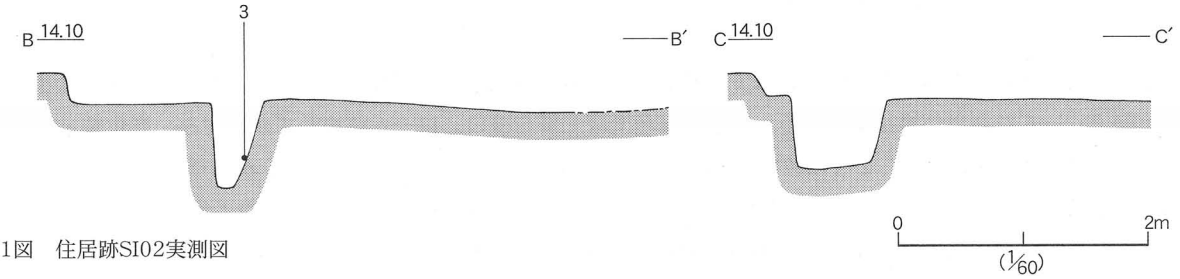
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
Ｐ１	３６	２９	４２	Ｐ２	３９	３２	４６	Ｐ３	５８	４８	４２

本跡の南東側にあたる半分が削平されているものの、覆土は住居中央で良好に残存していた。確認では３層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。1層褐色土は上層を覆い、ローム粒をわずかに含み、しまりと粘性にとむ。2層暗褐色土は覆土中層から床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。床面に堆積する3層褐色土は、ローム粒子を少量含み、しまりがあり、粘性にとむ。

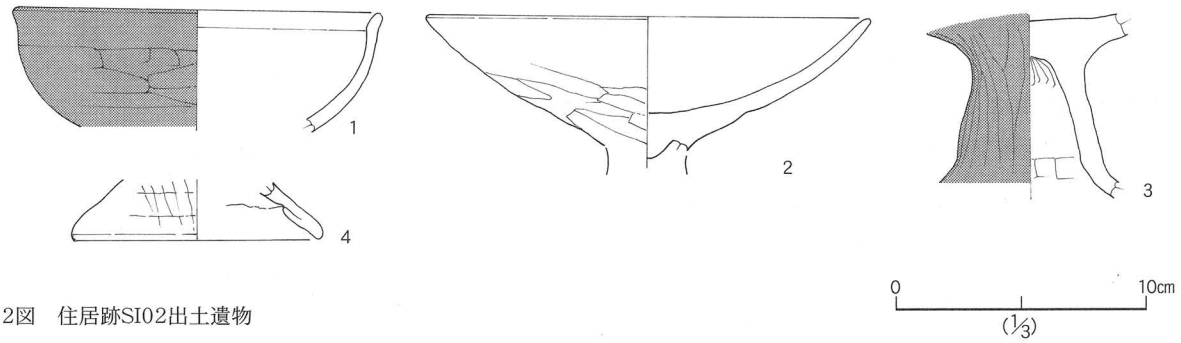
カマドは北西壁のほぼ中央に設置してある。北壁を幅38cm、奥行45cmほど半楕円形状に掘り込み煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ120cm、両袖間の最大幅99cm、袖部構築材は灰白粘土で構築されている。火床部は長径63cm、短径42cmの楕円形で、深さ8cmほど鍋底状に掘り窪めており、底面は被熱赤化していた。、カマド覆土は４層に分層され、１・２層は崩落土。３層は焼土粒子を多量に含む褐色土。４層は煙道部に堆積した明黄褐色土である。

遺物は土師器、須恵器、土製品である支脚と土玉および石製品である石製模造品（双孔円板）で、カマド周辺お





第11図　住居跡SI02実測図



第12図　住居跡SI02出土遺物

よび床面上もしくは直上から出土した。1～15は土師器である。１～４は坏で口縁部はヨコナデ、外面体部はヘラケズリ、内面はヘラナデが施され、２～４は赤彩されている。５は丸底の鉢で、口縁部はヨコナデ、外面体部はヘラケズリ、内面はヘラナデが施され、外面のみ赤彩されている。６～15は甕である。６・７は口縁部が短く直行し、体部が内湾する。８～12は口縁部が外反し、体部は内湾する。13～15は底部破片である。16は須恵器・甕の体部破片。外面は平行タタキ、内面は青海波紋で調整されている。12はカマド燃焼部前面に、１と11はカマド西脇で、また４・５はカマド東側で出土した。17は土製支脚である。ほぼ完存し、截頭円錐形を呈し、横断面は略円形をなす。頂部平坦面の径は5.29cm、最大径は下端部で径10.16cm、長さを18.9cm測る。表面は指ナデで整形される。胎土に石英・雲母・スコリア・長石粒を含み、全体的に脆い。18・19は球形の土玉で、18は径2.25cm、孔径0.31cm、重量8.86gを測る。ほぼ球形で、両面に小さな平坦面をもつ。19は径2.55cm、孔径

0.65cm、重量13.48gを測る。球形を呈し、作りは丁寧である。18はカマド燃焼部の出土である。20は滑石製の有孔円板である。形態は略円形を呈し、長さ2.163cm、幅2.268cm、厚さ0.336cm、重さ2.66gを測り、径0.14cmの２孔を有する。両面および側縁に仕上げ研磨が施されている。南西壁際床面上の出土である。古墳時代後期・７世紀前半に比定される。

２）住居跡SI02（第11・12図）

調査区の南西端で検出された住居で、南西側約半分が大きく削平され、北東側のみ検出できた。確認された規模は中心軸で東西4.52m、南北3.12m、深さ0.17～0.24mで、平面形は方形を呈しているものと推定される。主軸は炉跡やカマドが不明のため確実ではないが、北軸を主軸とすると、傾きはN－44°－Ｅを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は住居の中央部が顕著でほぼ全面硬化面が確認できる。壁溝は構築されていない。検出された主柱穴は北側１本のみで、長径49cm、短径44cmの楕円形で、深さ6,7cmを測るのみである。また北コーナーには楕円形を呈する貯蔵穴が検出された。規模は南北76cm、東西69cm、深さ57cmを測り、掘形はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は自然堆積層である。覆土下層より高坏3が出土している。

本跡の南西側にあたる半分が削平されているものの、覆土は住居中央で良好に残存していた。確認では３層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。１層暗褐色土は上層を覆い、ローム粒をわずかに含み、炭化粒・焼土粒を含む。しまりと粘性にとむ。２層褐色土は床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。床面に堆積する3層黄褐色土は、壁際に堆積し、ローム粒子を多量に含み、しまりがあり、粘性にとむ。

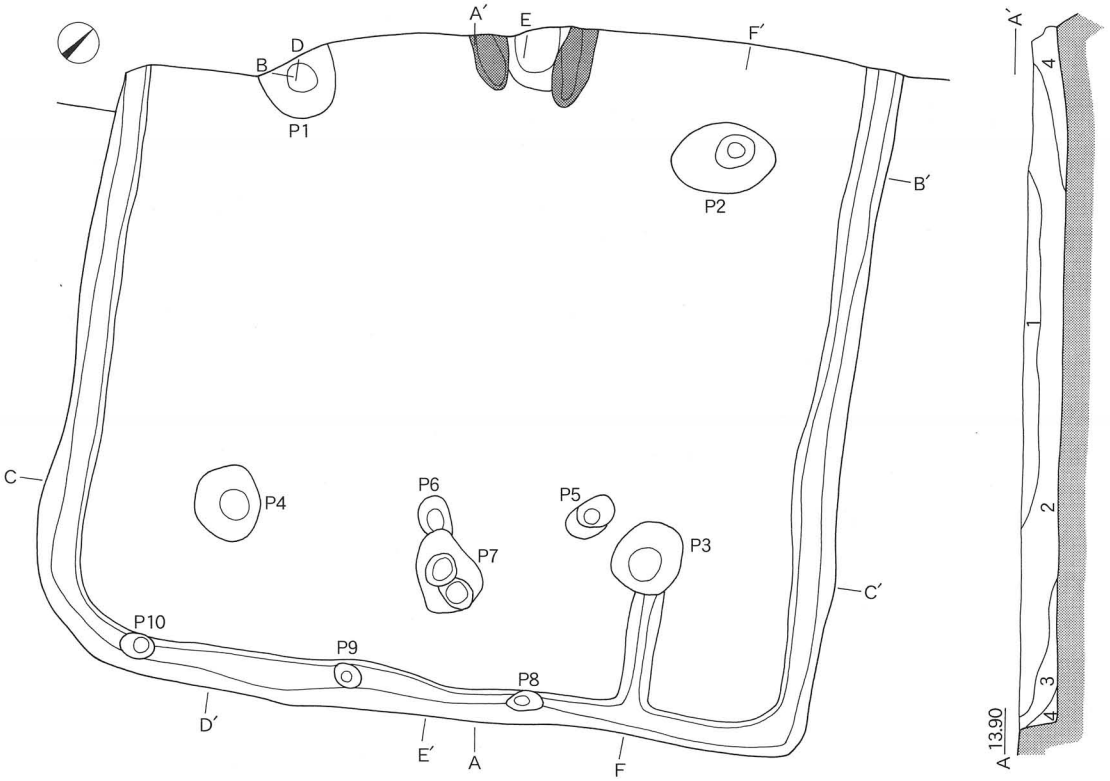
遺物は土師器が出土している。土師器は坏と高坏である。1の坏は体部が内湾し、口縁部が僅かに外反する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、外面に赤彩が施されている。２～４は高坏である。２の坏部は外傾して立ち上がり、坏部外面下位に稜を有し、３・４は脚部破片。３はエンタシス状を呈する。古墳時代中期前半・５世紀後半に比定される。

３）住居跡SI03（第13～16図）

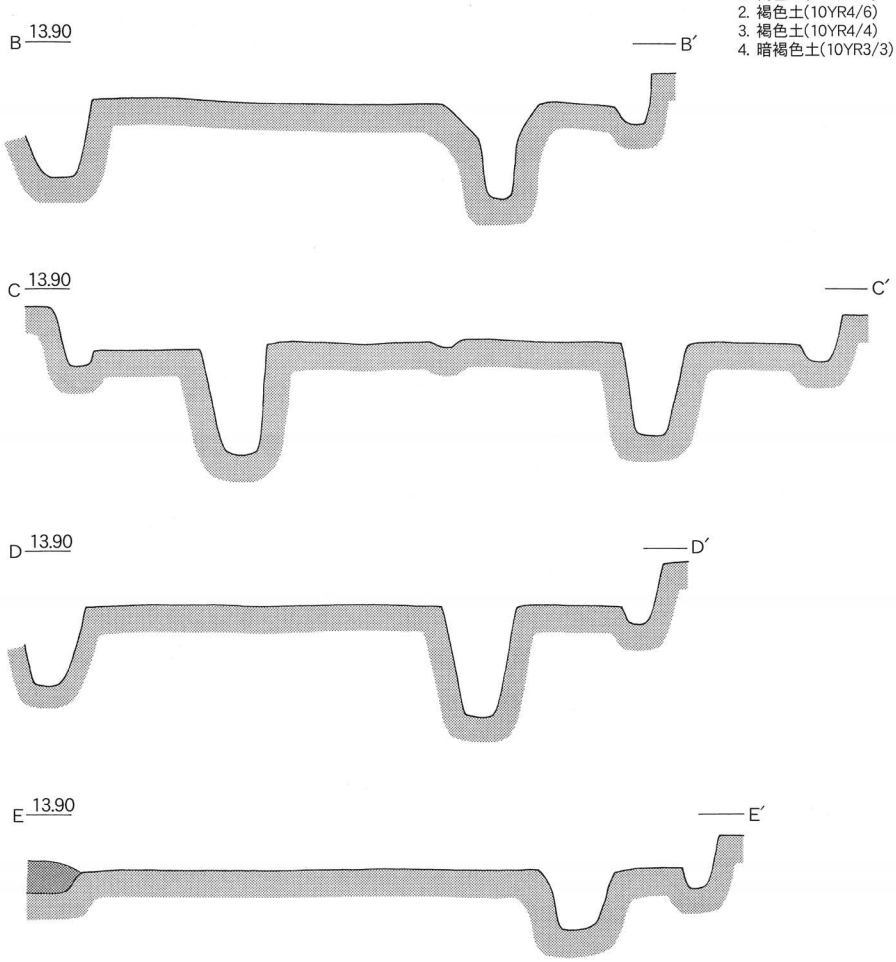
調査区の北西端で検出された住居で、北西壁際側が全面削平されている。確認された規模は中心軸で東西6.29m、南北5.58m、深さ0.24～0.34mで、平面形は方形を呈しているものと推定される。主軸は北壁中央にカマドが設置しており、傾きはN－38°－Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著で全面硬化面が確認できる。壁溝はカマド部分を除き全周する。規模は上面幅で0.25～0.35m、深さ0.09～0.13mの横断面U字状を呈する。さらに南東側に設置された主柱穴Ｐ３と南壁溝に繋がる間仕切溝が構築されている。幅23cm、長さ85cm、深さ11cmの横断面U字状を呈する。また検出された主柱穴は4本（Ｐ１～Ｐ４）で住居対角線上に設けている。また南壁際に出入口部の梯子穴と推定される柱穴（Ｐ６・Ｐ７）が確認されている。３本重複しており、少なくとも２穴は柱抜き取り穴であろう。な４本の柱根痕は検出されていない。また主柱穴Ｐ３脇に支柱穴（Ｐ５）が穿ってある。これはＰ３と壁溝に繋がる間仕切溝に関連するものであろう。さらに南壁溝中には1.5m間隔で３本の壁柱穴（Ｐ８～Ｐ10）が検出されている。以下検出された柱穴の計測値である。

柱穴計測値（cm）

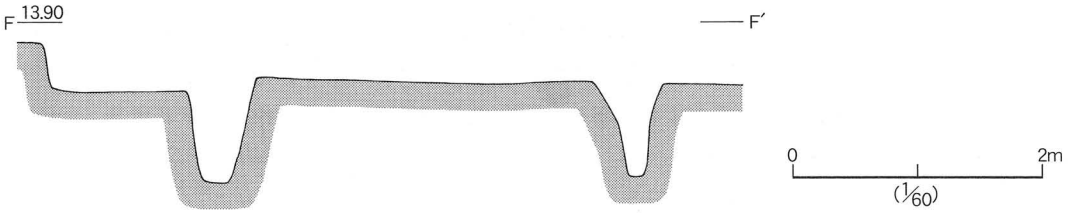
	長径 × 短径	深さ		長径 × 短径	深さ		長径 × 短径	深さ
Ｐ１	５９　４９	６１	Ｐ２	８４　５５	７５	Ｐ３	６０　５５	８３
Ｐ４	６０　５１	８６	Ｐ５	４３　３６	３９	Ｐ６	３５　２５	２５



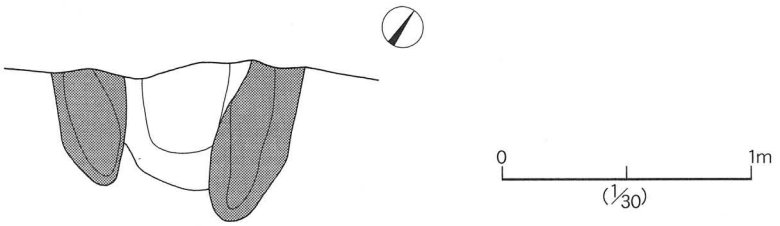
1. 褐色土(10YR4/4)　ローム粒子をわずかに含む
2. 褐色土(10YR4/6)　ローム粒子を少量含む
3. 褐色土(10YR4/4)　ローム粒子を少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を少量含む



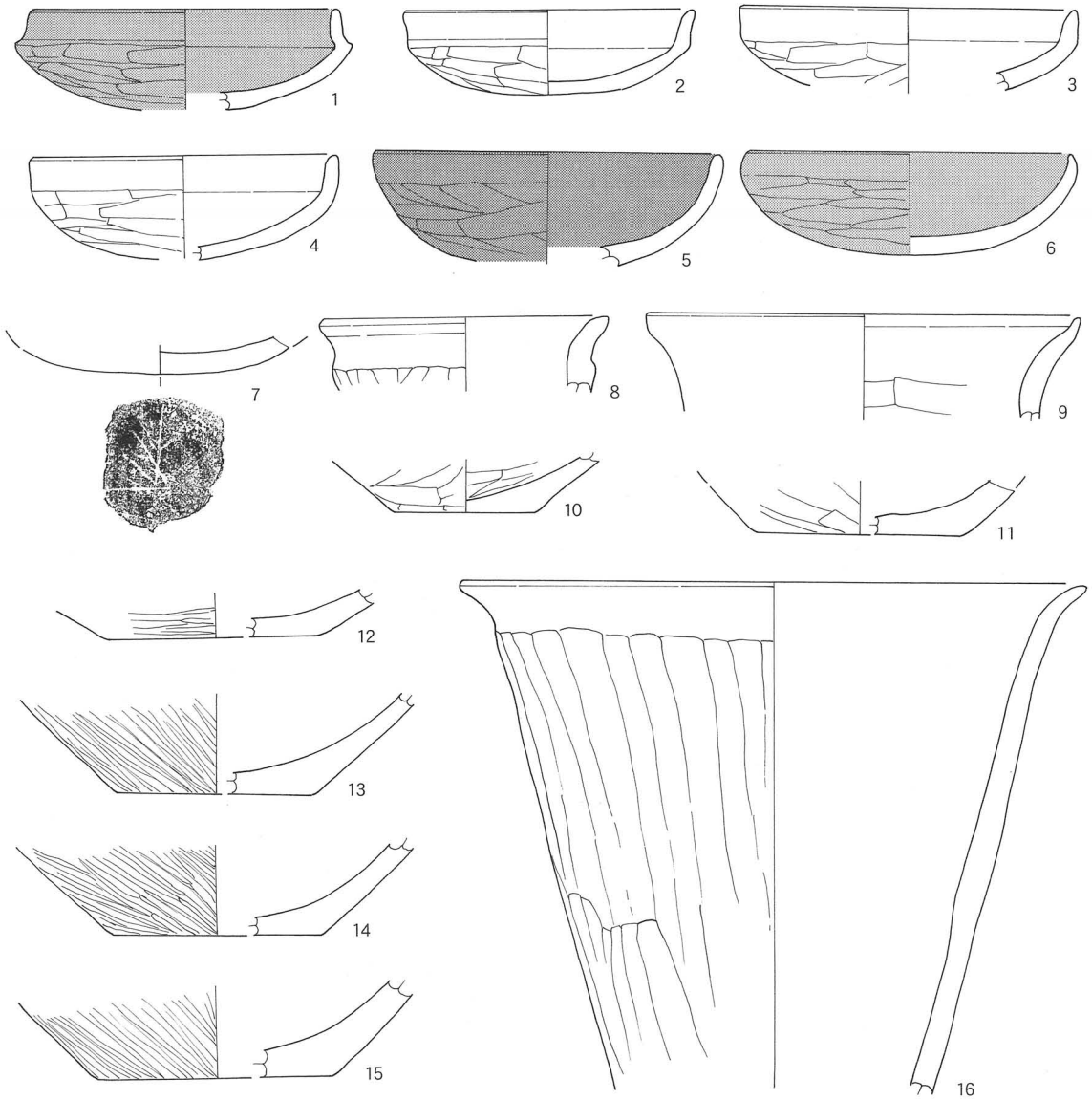
第13図　住居跡SI03実測図（1）



第14図　住居跡SI03実測図（2）



第15図　住居跡SI03カマド実測図



第16図　住居跡SI03出土遺物

P7	65	50	53	P8	30	13	24	P9	25	15	48
P10	25	20	34								

覆土は４層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。１層褐色土は上層を覆い、ローム粒をわずかに含み、しまりと粘性にとむ。２層褐色土は覆土中層から床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。壁際に堆積している３層褐色土および４層暗褐色土は、ローム粒子を少量含み、しまりがあり、粘性にとむ。

カマドは北壁のほぼ中央に設置してあるが、土砂採取により煙道部が湮滅している。したがってカマド調査は十分に実施できなかった。確認できる現存規模は焚口部からの長さ長さ50cm、両袖間の最大幅94cm、袖部構築材は灰白粘土で構築されている。火床部は長径50cm、短径42cmの楕円形で、深さ16cmほど鍋底状に掘り窪めており、底面は被熱赤化していた。袖部は約４cmの残存で、明瞭な覆土は確認できなかった。

遺物は土師器のみでカマド周辺および床面上もしくは直上から出土した。1～７は坏である。１～４は口縁部下に稜を有し、1は口縁部が内傾し、２～４は口縁部が直行もしくは僅かに外反する。６は器高の浅い椀形を呈し、口縁部は尖り僅かに内湾する。口縁部はヨコナデ、外面体部はヘラケズリ、内面は４のヘラミガキを除きヘラナデが施され、１・６は黒色処理。５は赤彩されている。７は底部に木葉痕を残置している。８～15は甕である。８は口縁部が僅かに外反する。９は口縁部が大きく外反する。10～15は底部破片である。16は底部が欠損する甑である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部ヨコナデ、体部縦位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。古墳時代後期・６世紀末葉から７世紀前半に比定される。

４）住居跡SI04（第17～19図）

調査区の中央南側で検出された住居である。確認された規模は中心軸で東西5.01m、南北4.86m、深さ8cm～15cmで、平面形は方形を呈している。主軸は北壁中央にカマドが設置しており、傾きはN－05°－Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著で全面硬化面が確認できる。壁溝は東壁および南壁の一部を除き構築されている。規模は上面幅で13～24cm、深さ4～7cmの横断面U字状を呈する。検出された主柱穴は4本（Ｐ１～Ｐ４）で住居対角線上に設けているが、北西側主柱穴Ｐ１の北側に抜き取り痕が認められる。以下検出された柱穴の計測値である。

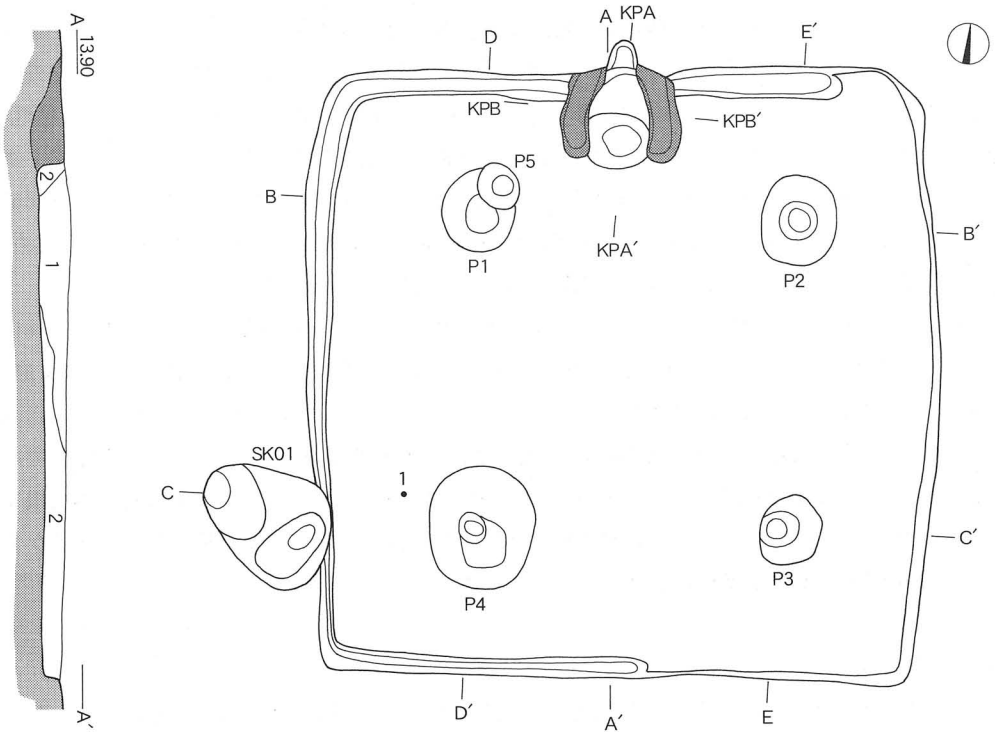
柱穴計測値（cm）

	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
Ｐ１	64	59	20	Ｐ２	71	60	52	Ｐ３	59	49	58
Ｐ４	98	85	53	Ｐ５	35	32	25				

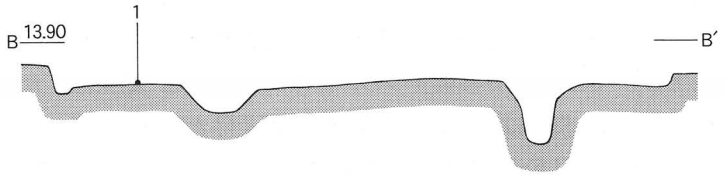
覆土は全体的に薄層で３層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。１層褐色土は上層から床面を覆い、ローム粒をわずかに含み、しまりと粘性にとむ。２層褐色土は覆土中層から床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。壁際に堆積している３層褐色土は、ローム粒子を少量含み、しまりがあり、粘性にとむ。

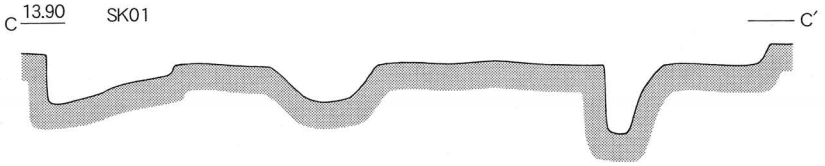
カマドは北壁のほぼ中央に設置してある。北壁を幅23cm、奥行29cmほど半楕円形状にに掘り込み煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ101cm、両袖間の最大幅95cm、袖部構築材は灰白粘土で構築されている。火床部は長径55cm、短径44cmの楕円形で、深さ4cmほど鍋底状に掘り窪めており、底面は被熱赤化していた。、カマド覆土は４層に分層され、１・4層は崩落土。３層は焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土。４層は火床部から煙道部に堆積した赤褐色土である。

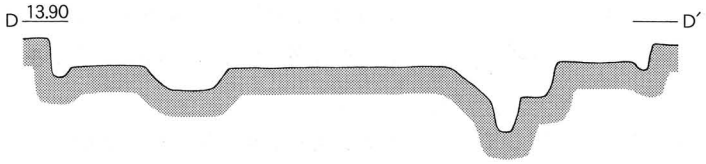
遺物は土師器のみでカマド周辺および床面上から出土した。1～３は坏である。１・２は口縁部下に稜を有し、１は口縁部が内傾し、２は外反する。口縁部はヨコナデ、外面体部はヘラケズリ、内面はヘラナデが施され、１・３は黒色処理。２は赤彩されている。４～６は甕の底部破片である。古墳時代後期・６世紀後半に比定される。

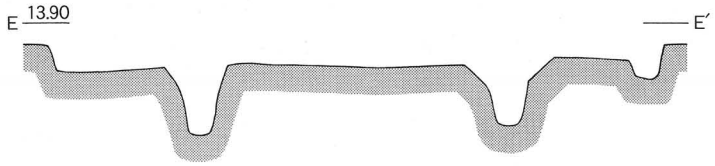


1. 褐色土(10YR4/4)
少量のローム粒を含む
2. 褐色土(10YR4/6)
少量のローム粒を含む
3. 褐色土(10YR4/6)
少量のローム粒、粘土粒を含む



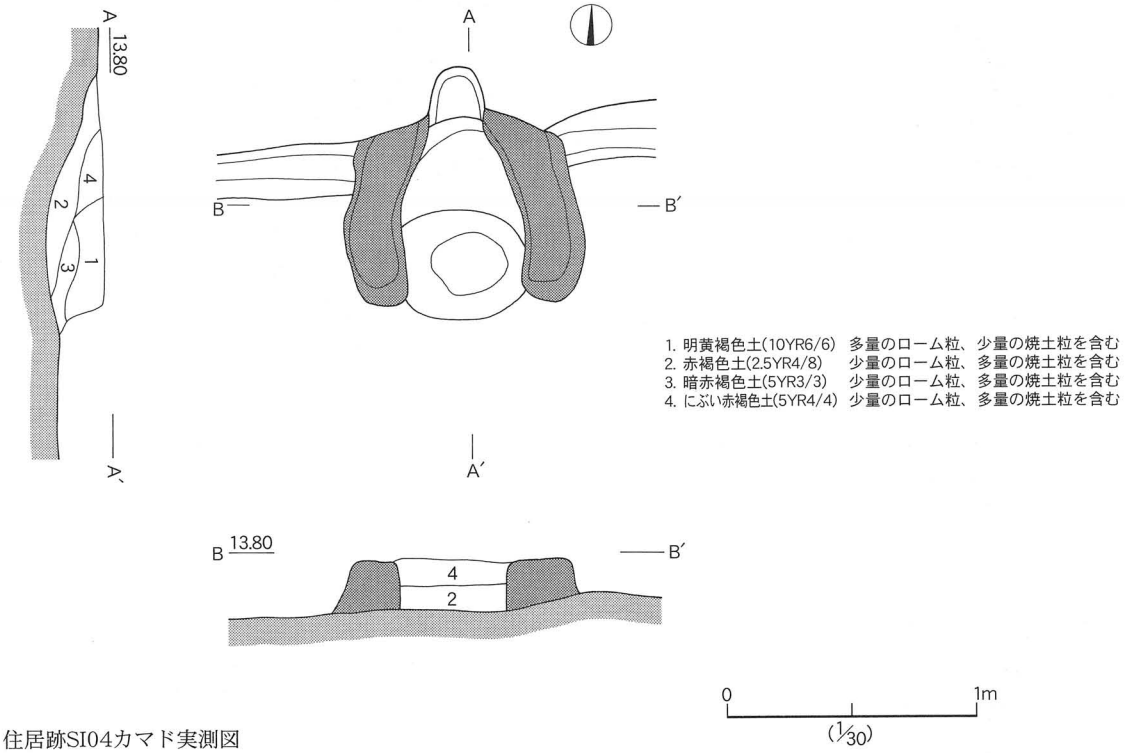




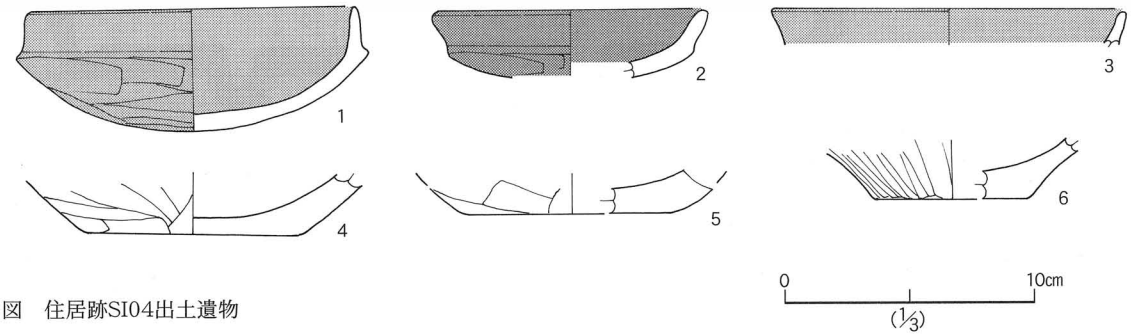


第17図　住居跡SI04実測図

0　2m
(1/60)



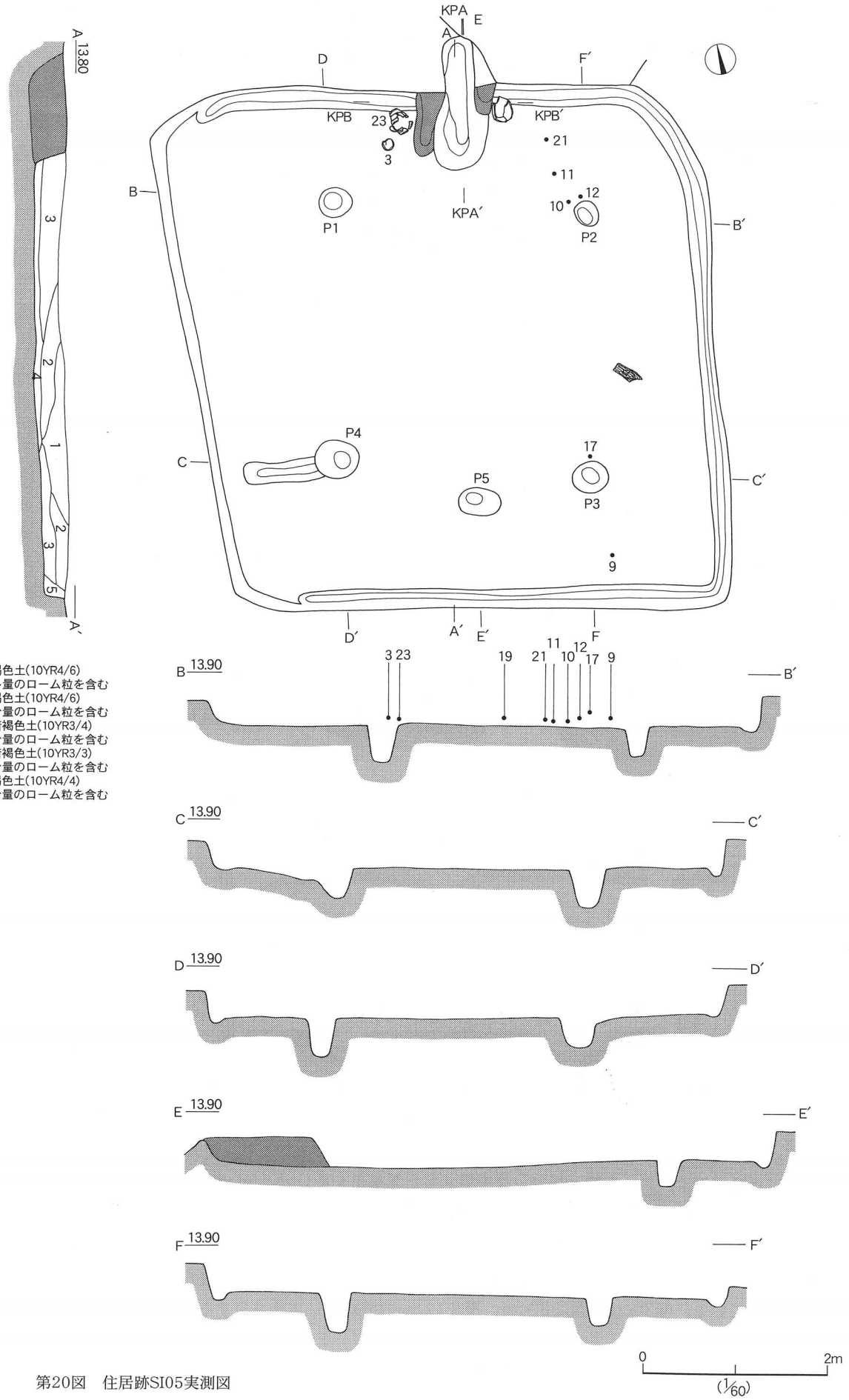
第18図　住居跡SI04カマド実測図



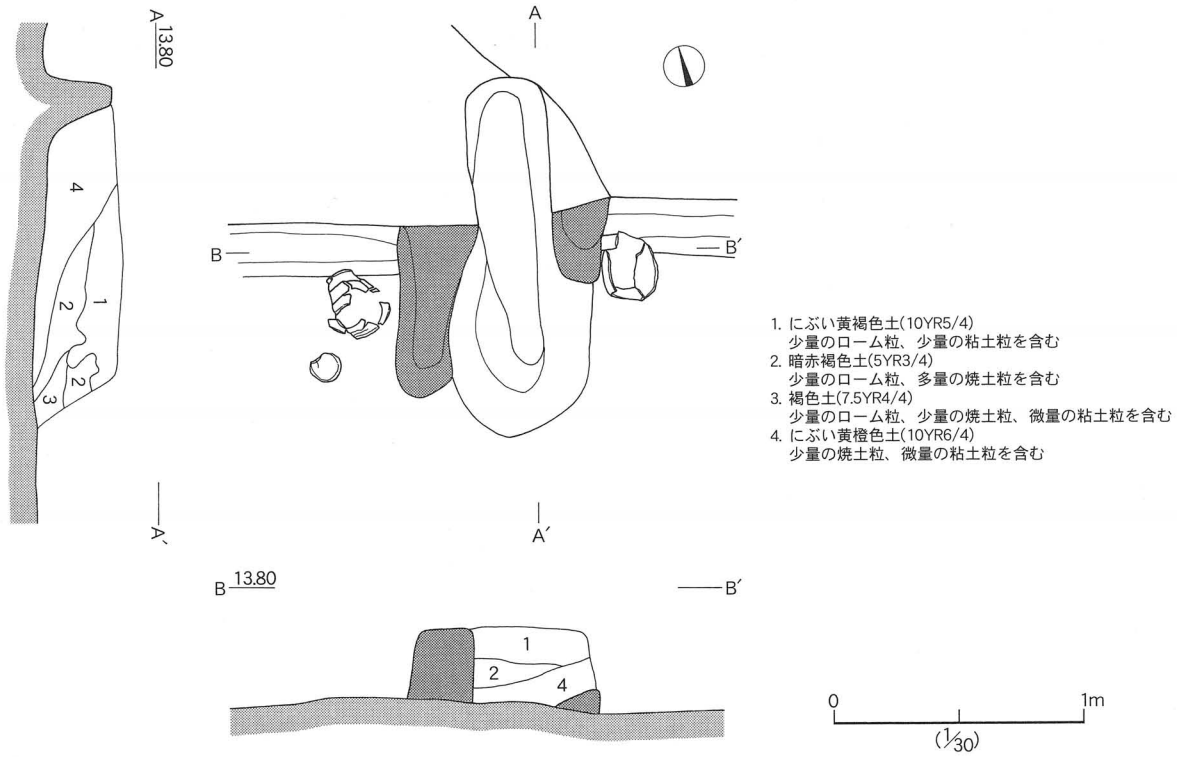
第19図　住居跡SI04出土遺物

5）住居跡SI05（第20～23図）

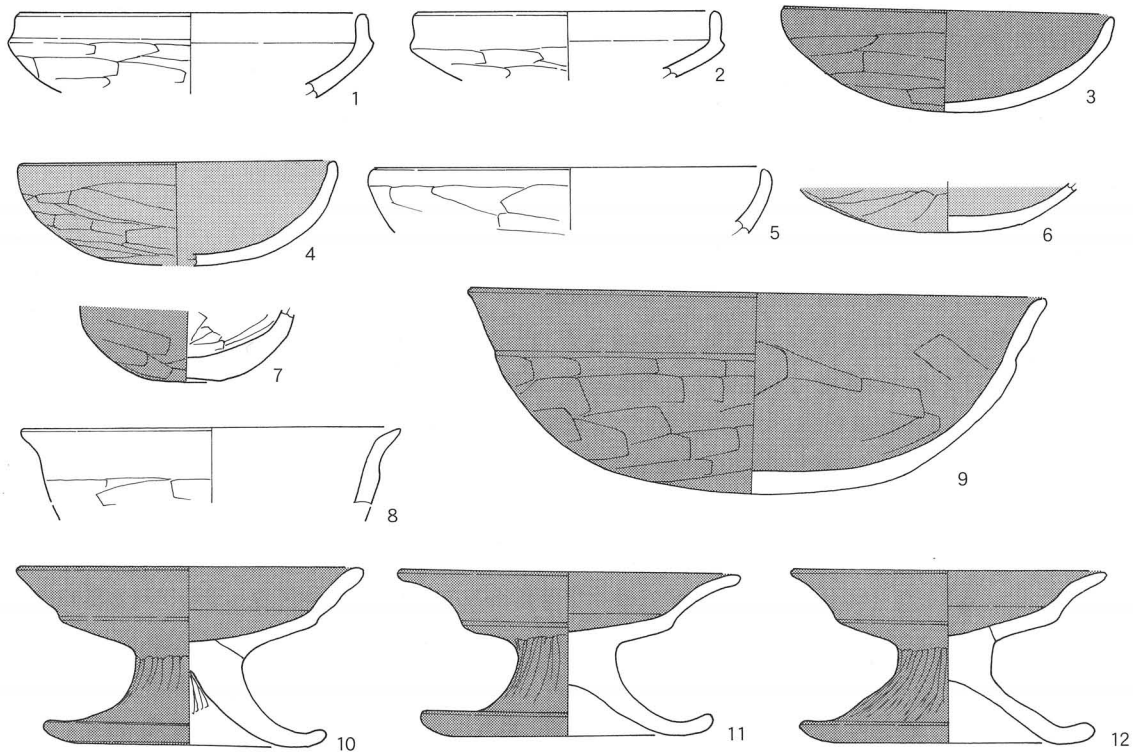
調査区の中央で検出された焼失住居で、北東側で住居跡ＳＩ06を切って構築している。確認された規模は中心軸で東西5.86m、南北5.59m、深さ0.24～0.35mで、平面形は方形を呈している。主軸は北壁中央にカマドが設置しており、傾きはN－02°－Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著で全面硬化面が確認できる。また北東床面上には焼土塊が２ヶ所と炭化物が１ヶ所検出され、火災住居であることが判明した。壁溝は西壁を除き構築されている。規模は上面幅で14～24cm、深さ7～29cmの横断面U字状を呈する。さらに南西側に設置された主柱穴Ｐ４と西壁溝に繋がる間仕切溝が構築されている。幅30cm、長さ80cm、深さ12cmの横断面U字状を呈する。また検出された主柱穴は4本



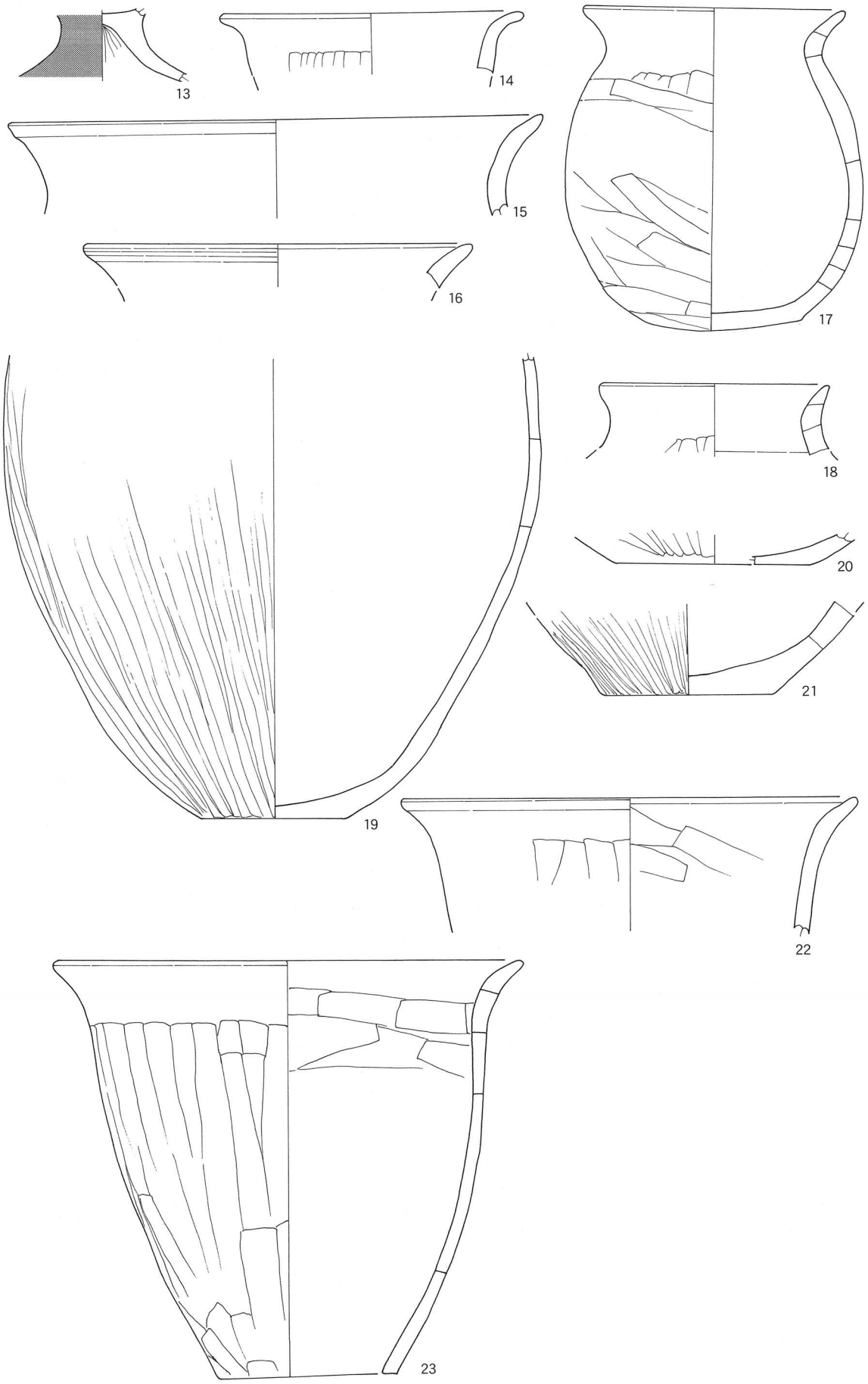
第20図　住居跡SI05実測図



第21図　住居跡SI05カマド実測図



第22図　住居跡SI05出土遺物（1）



第23図　住居跡SI05出土遺物（2）

（Ｐ１～Ｐ４）で住居対角線上に設けている。また南壁際に出入口部の梯子穴と推定される柱穴（Ｐ5）が確認されている。以下検出された柱穴の計測値である。

柱穴計測値（cm）

	長径	×	短径	深さ		長径	×	短径	深さ		長径	×	短径	深さ
Ｐ１	３５		３２	３８	Ｐ２	２９		２３	２７	Ｐ３	３６		３４	４０
Ｐ４	４８		４３	３３	Ｐ５	４３		３０	２７					

覆土は５層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。１層褐色土は上層から床面を覆い、ローム粒をわずかに含み、しまりと粘性にとむ。2層褐色土は覆土中層に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。３層暗褐色土は覆土中層から床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。４層暗褐色土は床面上に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。壁際に堆積している５層褐色土は、ローム粒子を少量含み、しまりがあり、粘性にとむ。

カマドは北壁のほぼ中央に設置してある。北壁を幅30cm、奥行50cmほど細長く掘り込み煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ141cm、両袖間の最大幅78cm、袖部構築材は灰白粘土で構築されている。火床部は長径82cm、短径56cmの楕円形で、深さ２cmほど鍋底状に掘り窪めており、底面は被熱赤化していた。カマド覆土は4層に分層され、１・３層は崩落土。２層は焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土。４層は火床部から煙道部に堆積したにぶい黄橙色土である。

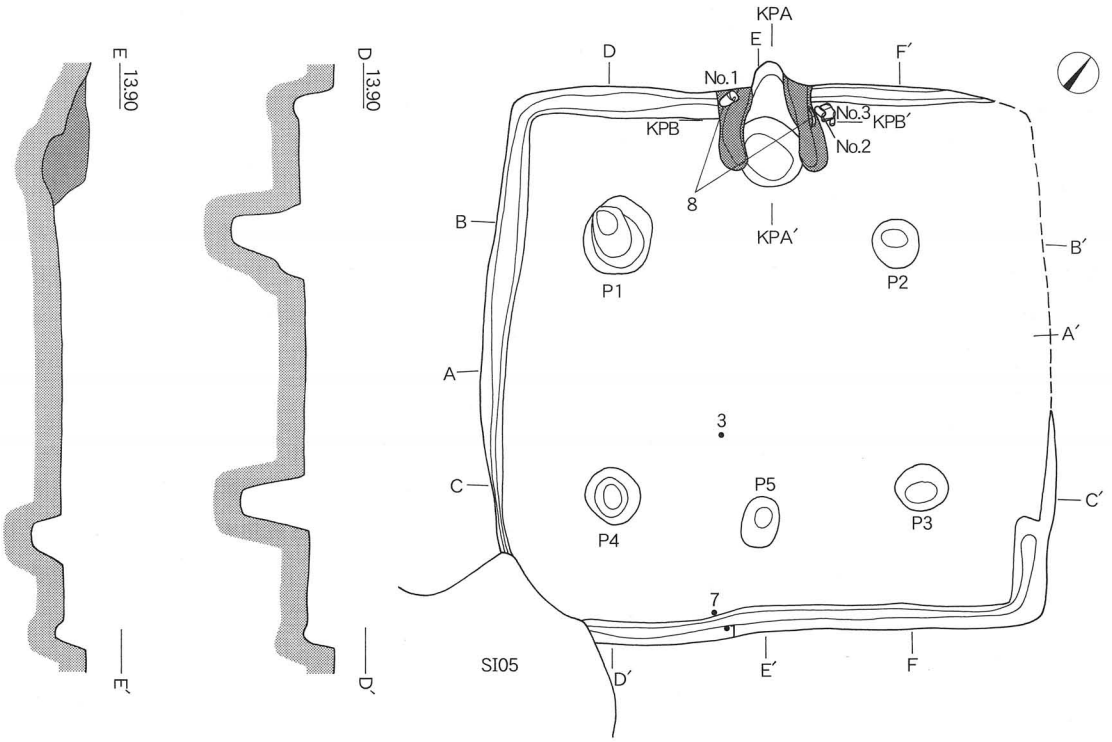
遺物は土師器のみでカマド周辺および床面上もしくは直上から出土した。1～６は坏である。１・２は口縁部下に明瞭な稜を有し、口縁部が直行もしくは僅かに内湾する。３～６は器高の浅い埦形を呈し、口縁部は尖り直行もしくは僅かに内湾する。口縁部はヨコナデ、外面体部はヘラケズリ、内面はヘラナデが施され、３は赤彩。６は黒色処理が施されている。７は丸底の小形埦で、外面に赤彩されている。８・９は鉢である。口縁部下に稜を有し、９は大形の鉢で丸底となり、内外面に赤彩が施されている。10～13は高坏である。10～12の３点はほぼ完形である。坏部は口縁部下に明瞭な稜を残し、口縁部は大きく外反する。脚部は短く喇叭状に開き、さらに端部において大きく外反する。４点ともに赤彩が施されている。14～21は甕である。14は口縁部が強く外反する。15・16は口縁部が大きく外反する。17はほぼ完形で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。６は口縁部が僅かに外反する。18は口縁部が短く外反する。19～21は底部破片である。22・23は甑である。23は単孔式の甑で、体部は内湾気味に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部ヨコナデ、体部縦位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。古墳時代後期・６世紀後半から７世紀前半に比定される。

６）住居跡SI06（第24～26図）

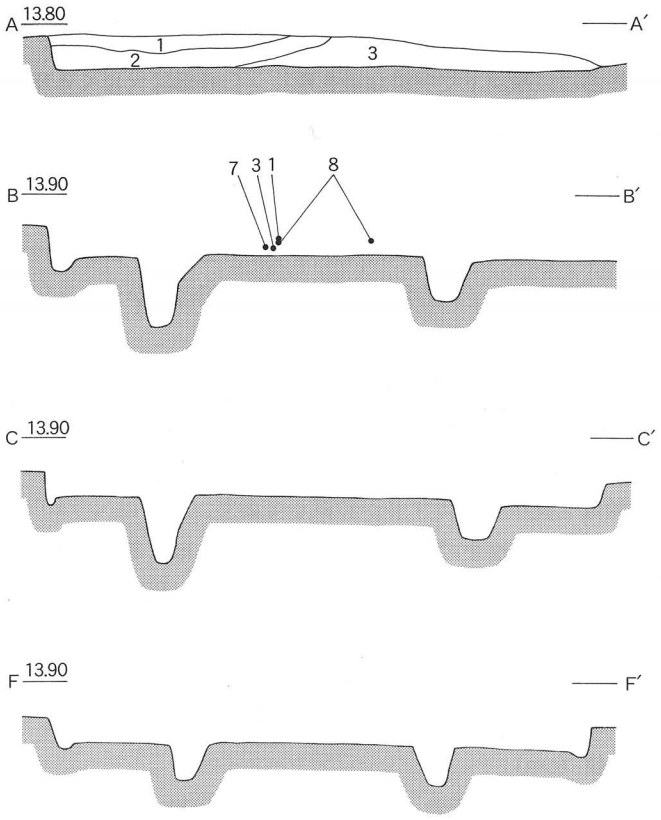
調査区の北端で検出された住居で、南西コーナーで住居跡ＳＩ05に切られ、山砂採取により北東壁の一部が削平されている。確認された規模は中心軸で東西4.48m、南北4.45m、深さ0.17～0.22mで、平面形は方形を呈している。主軸は北壁中央にカマドが設置しており、傾きはN－40°－Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顕著で全面硬化面が確認できる。壁溝は東壁を除き構築されている。規模は上面幅で18～24cm、深さ3～7cmの横断面U字状を呈する。また検出された主柱穴は4本（Ｐ１～Ｐ４）で住居対角線上に設けている。また南壁際に出入口部の梯子穴と推定される柱穴（Ｐ5）が確認されている。以下検出された柱穴の計測値である。

柱穴計測値（cm）

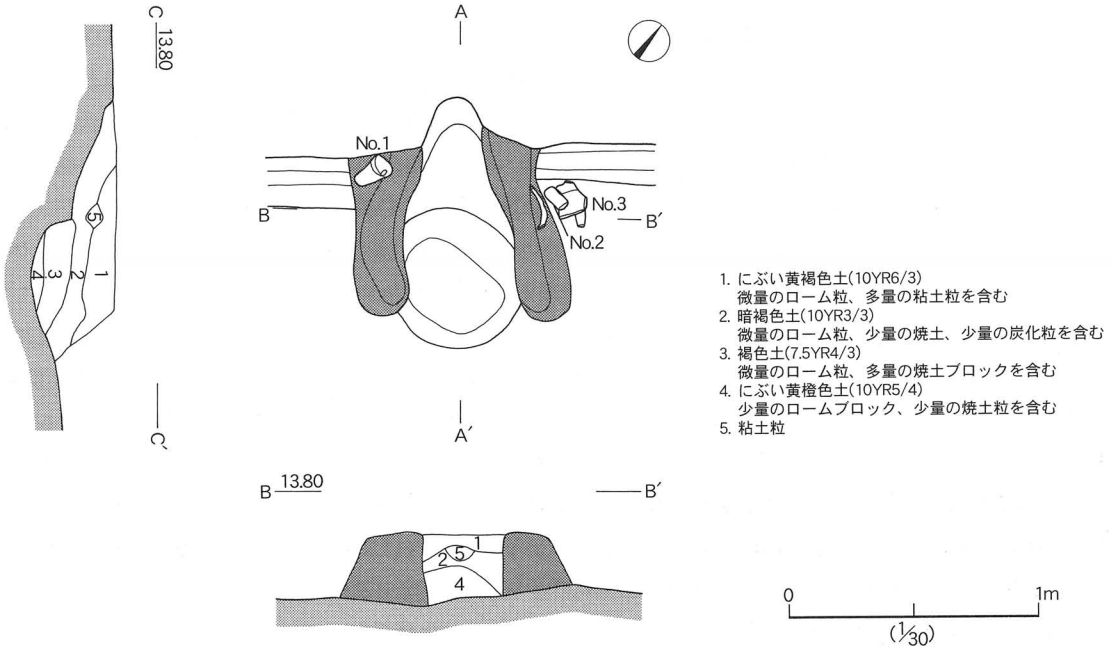
	長径	×	短径	深さ		長径	×	短径	深さ		長径	×	短径	深さ
Ｐ１	５９		５９	５５	Ｐ２	３８		３８	３３	Ｐ３	４４		３７	２９
Ｐ４	４５		４４	５３	Ｐ５	４１		３１	２３					



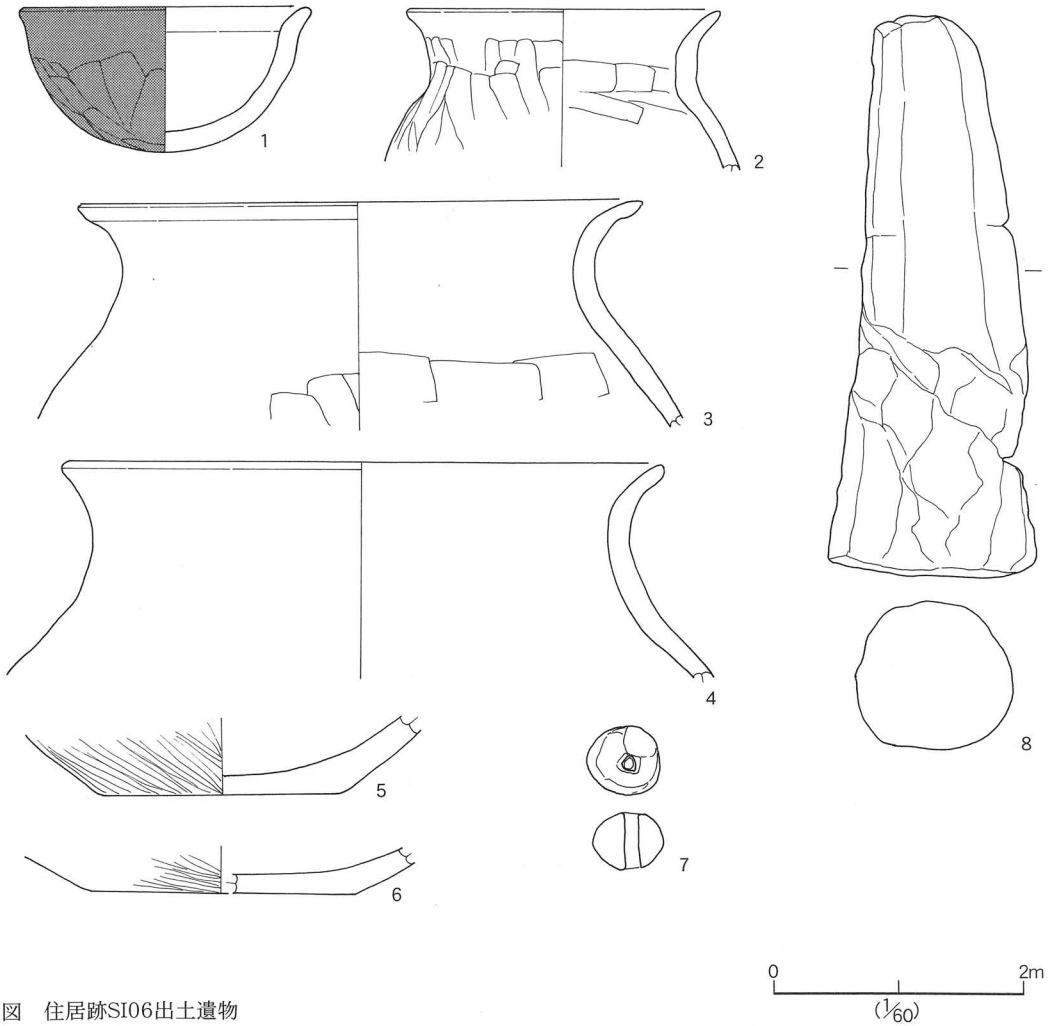
1. 褐色土(10YR4/6)　少量のローム粒を含む
2. 褐色土(10YR4/4)　少量のローム粒を含む
3. 暗褐色土(10YR3/4)　少量のローム粒を含む



第24図　住居跡SI06実測図



第25図　住居跡SI06カマド実測図



第26図　住居跡SI06出土遺物

覆土は３層が分層可能で、いずれも自然堆積層である。１層褐色土は覆土上層を覆い、ローム粒をわずかに含み、しまりと粘性にとむ。２層褐色土は覆土中層から床面上に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。３層暗褐色土は覆土中層から床面に堆積し、ローム粒を少量含み、しまりがあり、粘性にとんでいる。

カマドは北壁のほぼ中央に設置してある。北壁を幅25cm、奥行20cmほど半円状に掘り込み煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ100㎝、両袖間の最大幅81㎝、袖部構築材は灰白粘土で構築されている。火床部は長径58㎝、短径52㎝の楕円形で、深さ10cmほど鍋底状に掘り窪めており、底面は被熱赤化していた。カマド覆土は5層に分層され、１層は崩落土。２層は焼土粒子・炭化粒を少量に含む暗褐色土。３層は焼土ブロックを多量に含む褐色土。４層は火床部に堆積したにぶい黄橙色土である。

遺物は土師器、土製品である支脚と土玉で、土師器・埦は南壁際で、また土玉は床面中央南側から出土した。１～６は土師器である。１は埦で丸底の底部から体部は内湾し、口縁部がわずかに外反する。２～６は甕である。２はやや小形甕である。頸部は直行して立ち上がり、口縁部が短く外反する。３・４は口縁部が強く外反し、体部は内湾する。５・６は底部破片。斜行するヘラナデ整形が施されている。７は球形の土玉である。径2.83cm、孔径0.53cm、重量15.44gを測る。作りは比較的丁寧で、孔部両面に面取り成形を施している。８は土製支脚である。ほぼ完存し、截頭円錐形を呈し、横断面は略円形をなす。頂部平坦面の径は3.96cm、最大径は下端部で径8.24cm、長さ22.1cmを測る。表面は指ナデで整形される。胎土にチャート・石英・雲母・スコリア・長石粒を含み、全体的に脆い。古墳時代後期・６世紀後半に比定される。

（小川和博）

第Ⅲ章　まとめ

はじめに

根崎遺跡は常総台地北東部、通称稲敷台地縁辺に形成された一段低い低段丘に立地している。周囲は標高25m以上の洪積台地が展開しており、本遺跡の立地する台地はこの高位面から東側の沼里川に向かって突出する先端部、標高わずか13.8mの平坦面の少ない緩傾斜部に集落が形成されているのである。したがって後背地の高位面との比高差は13mを測り、また低位面である現水田との比高差はわずか５ｍである。こうした周囲の洪積台地よりも10m以上低い段丘上で、平坦面も狭小で、いわゆる猫の額ほどの土地に縄文時代前期後半の屋外炉１基と土坑１基、古墳時代中期から後期の住居跡６軒が検出された。なお、本遺跡西側100mの標高26.6mの高位面には弥生時代、古墳時代の集落である下ノ内遺跡が位置する。現況は山砂採取により台地が分断されているが、本来は地続きであり、同一遺跡と推定される。ここでもう一度検出された成果を概観し、まとめとしたい。

１．縄文時代

まず縄文時代前期の遺構と遺物が検出されている。前期後半の屋外炉と土坑である。出土遺物の少なさから時期判断が困難であったが、覆土の状況が隣接する古墳時代よりも褐色に近い土層であること、また締りの状況も密であること、さらに小片であるが、縄文土器が覆土中に包含されていたことから、それぞれ縄文前期後半の時期に比定した。また包含層から早期前半から前期末葉までの土器片が出土している。早期としては井草Ｉ式がある。わずかに１点のみであるがここ稲敷台地における出土は貴重である。また中葉の沈線文系土器も纏まっていた。田戸下層式が中心となる。さらに条痕文系初期の子母口式土器が２点検出された。利根川流域における子母口式期の報告例は最近多くなってきている。また条痕文のみの施文土器は茅山上層式であろう。前期は前半・関山式土器があり、さらに諸磯ｂ式の有孔浅鉢の口縁部破片が出土している。後半の貝殻腹縁文の浮島式、興津式のほか縄文施文で結節縄文が施された粟島台式土器の出土は特筆される。

２．古墳時代

本遺跡の主体となるのは古墳時代中期から後期にかけての集落跡である。狭小な緩傾斜面に６軒の住居跡が密集していた。検出された住居跡は、すべてが完掘されたわけではないものの、住居跡の形態や出土遺物については十分な資料提供が行なわれているものと理解している。

まず中期の住居跡は２号住居跡（ＳＩ02）１軒のみである。検出は北側約半分のみで、北東壁辺側に炉跡が確認されていないことから、北西壁辺側に設置されていたものと推定する。覆土中から埦と高坏が出土している。破片による復元実測に基づくものであるが、埦は口縁部が短く直立し、体部の内湾が弱くなる。また高坏は坏部の稜が明瞭ではなく、脚部も短脚化しており、年代的に５世紀後半に位置づけ可能であろう。

また後期については５軒確認されている。いずれも北壁辺にカマドが設置されているが、主軸方位にそれぞれ若干のブレがみられ、しかも比較的近接あるいは重複していることから時間差をもって構築されていることが読み取れる。したがって、出土遺物からその年代を確定しなければならないものの、決め手となる遺物量が全体的に豊富とは思えない。そこで「形態変化の大きい土師器坏を中心(樫村・浅井1992)」に年代差を検討していきたい。住居跡ＳＩ01・03～05でそれぞれ坏が出土している。大きく二種に分類できる。まず口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する須恵器模倣坏ａと口縁部と体部の境に稜をもたず、浅い埦状を呈する坏ｂである。住居跡ＳＩ01では坏ａはなく、坏ｂのみであるが、赤彩が施されているものが３点出土している。７世紀前半に推定される。住居跡ＳＩ03は坏ａと坏ｂが出土しており、坏ａは口縁部が内湾するものと、外反するものがある。また坏ｂは赤彩と黒色処理が施されている。６世紀末から７世紀前半であろう。住居跡ＳＩ04は坏ａのみで、口縁部が直立するも

のと外反するものがあり、赤彩と黒色処理が施されている。６世紀後半であろう。住居跡ＳＩ05は纏まっている。坏以外に大形鉢や高坏に特徴がある。まず坏は坏ａと坏ｂがあり、坏ａは口縁部が直立し、赤彩と黒色処理が施されているものがある。また坏ｂも赤彩と黒色処理が施されている。大形鉢は丸底で体部と口縁部の境に明瞭な稜を有する。高坏は４点出土しているが、内３点はほぼ完存していた。坏部は明瞭な稜をもち、口縁部は大きく外傾し、脚部は短脚である。大形鉢、高坏ともに赤彩が施されている。高坏は６世紀後半であろう。しかし、住居跡ＳＩ06との切り合い関係や全体的な出土遺物をみると７世紀前半に比定される。最後の住居跡ＳＩ06は埦と甕の出土があり、埦は丸底で体部は内湾し、口縁部が短く外反する。６世紀後半と推定される。

以上のように今回調査した５世紀後半の段階と６世紀後半から７世紀前半の段階という大きく二期にわたる集落構成は、台地続きで高位面に形成された「下ノ内遺跡」においても同様の集落構成が確認されている。したがって、この二段階において両遺跡は相互密接な関係にあったと判断することができる。しかし、台地高位面の下ノ内遺跡と低位面の根崎遺跡では明らかに土地利用が異なっている。つまり高位面では平坦が広大でありながら、集落としての密度は過疎的であり、逆に低位面では狭小な緩傾斜地でありながら密集している。こうした土地条件の不利な低位面に住居の集中化が展開されている理由はなにか。低位面の利便性を考慮した場合、日常生活における湧水点が近いこと、さらに作業行為としての水利や水田耕作には便利であったことなど以外には考えられない。むしろ霞ヶ浦における水位の上昇による水害のほうがリスクが高いような気がする。とにかくこうした高位面と低位面に共存する二面性集落は周囲で確認することができず、特殊な集落構成とみることができないであろうか。

（小川和博）

参考文献

樫村宣行・浅井哲也　1992「常総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』№342所収ニュー・サイエンス社
樫村宣行　1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』２号所収(財)茨城県教育財団
樫村宣行　1996「和泉式土器編年考－茨城県を中心にして」『研究ノート』５号所収(財)茨城県教育財団

付章　根崎遺跡　出土土器観察表

SI01

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第８図－１	土師器	坏	口縁1/3	14.0	4.7	－	良好	石英・黒色粒子・長石	橙色7.5YR6/6	
第８図－２	土師器	坏	口縁1/8	13.0	(2.5)	－	良好	海綿骨針・石英・長石	褐色7.5YR4/3	赤彩
第８図－３	土師器	坏	口縁1/16	14.0	(2.7)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	橙色2.5YR6/6	赤彩
第８図－４	土師器	坏	底部2/3	－	(1.9)	7.0	良好	黒色粒子・チャート・石英・長石	明赤褐色4/8	赤彩
第８図－５	土師器	碗	口縁1/3	16.0	9.3	－	良好	石英・長石	にぶい黄橙色10YR7/4	赤彩
第８図－６	土師器	甕	口縁1/6	12.0	(4.8)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	にぶい赤褐色5YR4/3	
第８図－７	土師器	甕	口縁1/10	18.0	(4.5)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	橙色5YR6/6	
第８図－８	土師器	甕	口縁1/4	14.6	(5.5)	－	良好	石英・長石	浅黄橙色10YR8/4	
第８図－９	土師器	甕	口縁1/6	18.0	(4.2)	－	良好	石英・長石	橙色5YR4/6	
第８図－10	土師器	甕	口縁1/5	22.0	(4.6)	－	良好	雲母・石英・長石	明赤褐色5YR5/6	
第８図－11	土師器	甕	口縁・体部1/3	26.0	(35.6)	－	良好	石英・長石	浅黄橙色10YR8/4・赤褐色2/5YR4/6	
第９図－12	土師器	甕	口縁1/3・体部1/2	22.8	(19.8)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	赤褐色5YR4/6・黒褐色5YR2/1	
第９図－13	土師器	甕	底部1/4	－	(3.5)	8.0	良好	石英・黒色粒子・長石	浅黄橙色10YR8/6	
第９図－14	土師器	甕	底部1/4	－	(2.2)	7.0	良好	石英・長石	灰黄褐色10YR4/2	
第９図－15	土師器	甕	底部1/4	－	(1.9)	7.0	良好	石英・長石	明赤褐色2.5YR5/6	
第９図－16	須恵器	甕	胴部破片	－	－	－	良好	石英・長石	褐灰色10YR5/1・にぶい赤褐色5YR5/3	

SI02

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第11図－１	土師器	坏	口縁1/7	14.6	(4.3)	－	良好	石英・長石	明赤褐色2.5YR5/6	赤彩
第11図－２	土師器	高坏	坏部1/3	17.6	(5.6)	－	良好	海綿骨針・石英・チャート・黒色粒子・長石	にぶい黄橙色10YR6/4	
第11図－３	土師器	高坏	脚部残存	－	(7.3)	－	良好	石英・チャート・長石	にぶい赤褐色5YR5/4	赤彩
第11図－４	土師器	高坏	脚部1/6	－	(2.4)	10.0	良好	石英・黒色粒子・長石	にぶい黄橙色10YR6/4	

SI03

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第15図－１	土師器	坏	1/4	12.6	(4.2)	(4.0)	良好	石英・長石	灰褐色5YR4/2	黒色処理
第15図－２	土師器	坏	口縁1/5	12.0	(3.5)	5.0	良好	海綿骨針・石英・長石	明赤褐色5YR5/6	
第15図－３	土師器	坏	口縁1/6	14.0	(3.3)	－	良好	石英・長石	にぶい黄褐色10YR4/3	
第15図－４	土師器	坏	口縁1/4	14.0	(4.3)	4.0	良好	石英・長石	にぶい黄褐色R4/3	
第15図－５	土師器	坏	口縁1/2	14.4	(4.6)	－	良好	海綿骨針・石英・長石	橙色7.5YR6/6	赤彩
第15図－６	土師器	坏	口縁1/8・底部	13.4	(4.3)	6.0	良好	雲母・石英・長石	黒褐色7.5YR3/1	黒色処理
第15図－７	土師器	坏	底部1/8	－	6.0	(1.5)	良好	石英・長石	黒褐色10YR3/1	木葉痕
第15図－８	土師器	甕	口縁1/8	12.0	(3.0)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	橙色7.5YR6/6	
第15図－９	土師器	甕	口縁1/10	18.0	4.3	－	良好	雲母・石英・長石	にぶい橙色7.5YR6/4	
第15図－10	土師器	甕	底部1/4	－	(2.3)	6.0	良好	石英・長石	にぶい黄褐色10YR5/4	
第15図－11	土師器	甕	底部1/4	－	(2.3)	8.8	良好	石英・長石	明赤褐色2.5YR5/8	
第15図－12	土師器	甕	底部1/10	－	(1.9)	9.2	良好	石英・黒色粒子・長石	にぶい赤褐色5YR4/3	
第15図－13	土師器	甕	底部1/3	－	(3.8)	8.6	良好	石英・長石	にぶい黄褐色10YR5/3	
第15図－14	土師器	甕	底部1/4	－	(3.7)	9.0	良好	石英・黒色粒子・長石	黒褐色2.5YR3/1	
第15図－15	土師器	甕	底部1/4	－	(4.9)	10.2	良好	石英・長石	灰褐色7.5YR4/2	
第15図－16	土師器	甑	口縁1/8・体部1/4	26.0	21.0	－	良好	石英・チャート・長石	赤褐色5YR4/6	

SI04

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第18図－１	土師器	坏	1/2	13.0	4.8	6.0	良好	石英・長石	浅黄橙色10YR8/3・褐灰色10YR4/1	黒色粒子
第18図－２	土師器	坏	口縁1/8	11.0	(2.6)	－	良好	海綿骨針・石英・長石	橙色7.5YR7/6	赤彩
第18図－３	土師器	坏	口縁1/8	14.0	(1.4)	－	良好	石英・長石	黒褐色10YR2/1	黒色粒子
第18図－４	土師器	甕	底部1/3	－	(2.4)	9.0	良好	石英・黒色粒子・長石	黒褐色7.5YR3/2	
第18図－５	土師器	甕	底部1/4	－	(1.7)	9.0	良好	石英・黒色粒子・スコリア・長石	にぶい赤褐色5YR4/3	
第18図－６	土師器	甕	底部1/4	－	(2.3)	6.2	良好	石英・長石	にぶい褐色7.5YR6/3	

SI05

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第21図－1	土師器	坏	口縁1/8	14.0	(3.3)	－	良好	海綿骨針・石英・長石	灰黄褐色10YR6/2・にぶい赤褐色5YR5/3	
第21図－2	土師器	坏	口縁1/8	12.0	(2.6)	－	良好	海綿骨針・石英・長石	にぶい赤褐色5YR4/3	
第21図－3	土師器	坏	口縁1/3欠損	13.2	4.0	3.0	良好	石英・黒色粒子・長石	明赤褐色5YR5/6	赤彩
第21図－4	土師器	坏	1/4	12.6	(4.1)	4.0	良好	石英・長石	褐色7.5YR4/3	黒色処理
第21図－5	土師器	坏	口縁1/12	16.0	(2.6)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	橙色5YR6/6	
第21図－6	土師器	坏	底部	－	(2.0)	6.0	良好	石英・長石	黒褐色10YR2/2	黒色処理
第21図－7	土師器	坩	底部	－	(2.8)	3.0	良好	石英・海綿骨針・黒色粒子・長石	にぶい赤褐色5YR5/4	赤彩
第21図－8	土師器	大型鉢	口縁1/7	15.0	(3.0)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	黒褐色2.5YR3/1	
第21図－9	土師器	鉢	口縁1/3・底部	23.0	7.9	6.0	良好	石英・長石	にぶい赤褐色2.5YR4/4	赤彩
第21図－10	土師器	高坏	完存品	13.8	7.1	11.3	良好	石英・海綿骨針・黒色粒子・長石	にぶい褐色7.5YR5/4(内)赤褐色2.5YR4/6	赤彩
第21図－11	土師器	高坏	袖部1/2欠損	13.6	6.5	11.6	良好	石英・海綿骨針・黒色粒子・長石	暗褐色7.5YR3/3	赤彩
第21図－12	土師器	高坏	袖部1/2欠損	12.6	6.8	11.6	良好	石英・海綿骨針・黒色粒子・長石	暗褐色7.5YR3/3	赤彩
第22図－13	土師器	高坏	脚部1/2	－	－	(3.7)	良好	石英・長石	明赤褐色2.5YR5/6	赤彩
第22図－14	土師器	甕	口縁1/8	16.0	(3.1)	－	良好	石英・長石	にぶい赤褐色5YR5/4	
第22図－15	土師器	甕	口縁1/8	28.0	(5.1)	－	良好	海綿骨針・石英・黒色粒子・長石	にぶい橙色7.5YR6/4	
第22図－16	土師器	甕	口縁1/10	20.4	(2.2)	－	良好	石英・黒色粒子・チャート・長石	橙色5YR6/6	
第22図－17	土師器	甕	完存品	13.6	16.9	8.0	良好	石英・チャート・スコリア・黒色粒子・長石	明赤褐色2.5YR5/6	
第22図－18	土師器	甕	口縁1/8	12.0	(3.7)	－	良好	石英・黒色粒子・長石	明赤褐色5/6	
第22図－19	土師器	甕	底部1/3・体部1/3	－	(24.2)	7.6	良好	石英・黒色粒子・長石	明赤褐色5YR5/6・橙色7/5YR7/6・にぶい赤褐色2.5YR4/4・黒褐色7.5YR3/1	
第22図－20	土師器	甕	底部1/5	－	(1.6)	10.4	良好	石英・黒色粒子・長石	にぶい黄褐色10YR4/3	
第22図－21	土師器	甕	底部	－	(4.8)	9.4	良好	石英・黒色粒子・長石	暗赤褐色5YR3/4	
第22図－22	土師器	甑	口縁1/16	24.0	(12.0)	－	良好	石英・長石	にぶい黄褐色10YR4/3	
第22図－23	土師器	甑	ほぼ完存品	24.6	21.9	9.3	良好	石英・黒色粒子・海綿骨針・長石	橙色5YR6/6・黒褐色7.5YR2/2	

SI06

挿図番号	器質	器種	遺存度	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼成	胎土	色調	備考
第25図－1	土師器	甕	ほぼ完存品	11.6	5.7	4.0	良好	石英・チャート・長石	明赤褐色5YR・黒褐色5YR2/1	赤彩
第25図－2	土師器	甕	口縁1/4	12.6	(6.3)	－	良好	石英・長石	褐色7.5YR4/3	
第25図－3	土師器	甕	口縁1/2	22.4	(8.9)	－	良好	雲母・石英・長石	橙色2.5YR7/8	
第25図－4	土師器	甕	口縁1/4	24.0	(8.3)	－	良好	石英・長石	にぶい褐色7.5YR5/4	
第25図－5	土師器	甕	底部1/3	－	(3.1)	10.0	良好	石英・長石	黒褐色10YR3/2	
第25図－6	土師器		底部	－	(1.3)	11.0	良好	石英・長石	褐色7.5YR4/3	

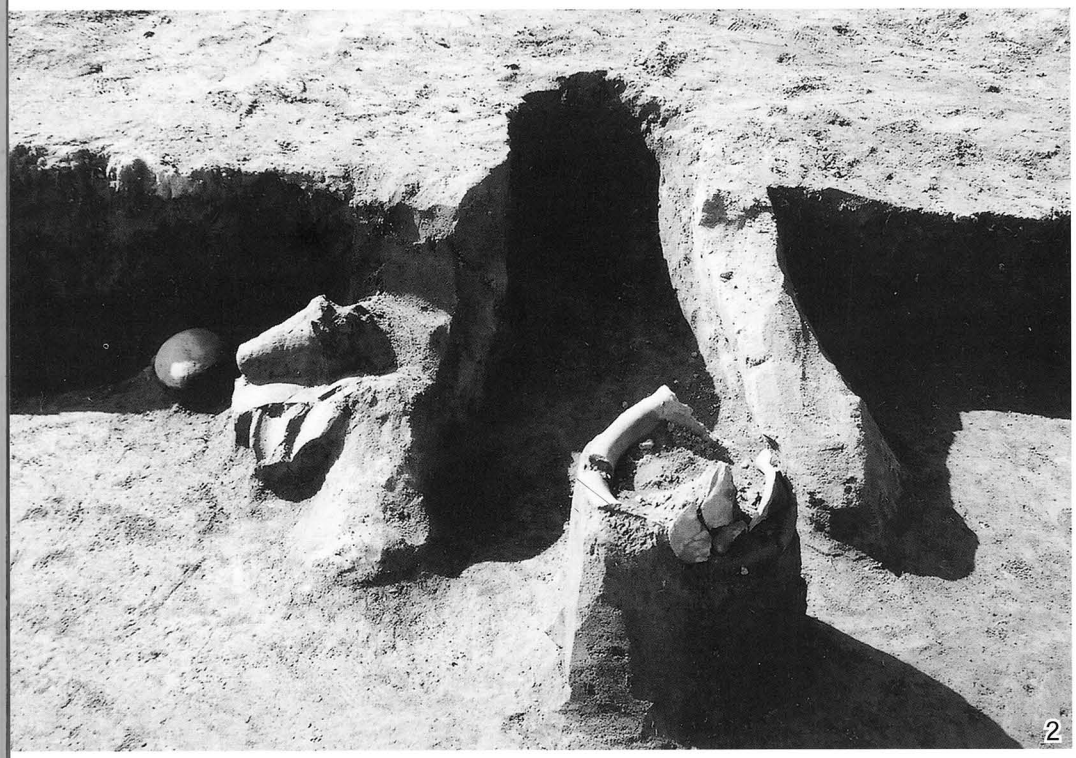
写 真 図 版

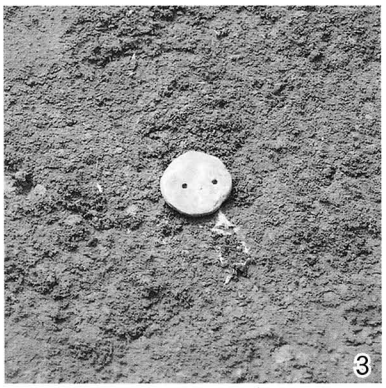
遺跡遠景

遺跡遠景

遺跡全景

住居跡SI01全景





2. 住居跡SI01カマド
3. 住居跡SI01出土石製模造品

住居跡SI02全景

住居跡SI03全景

住居跡SI04全景

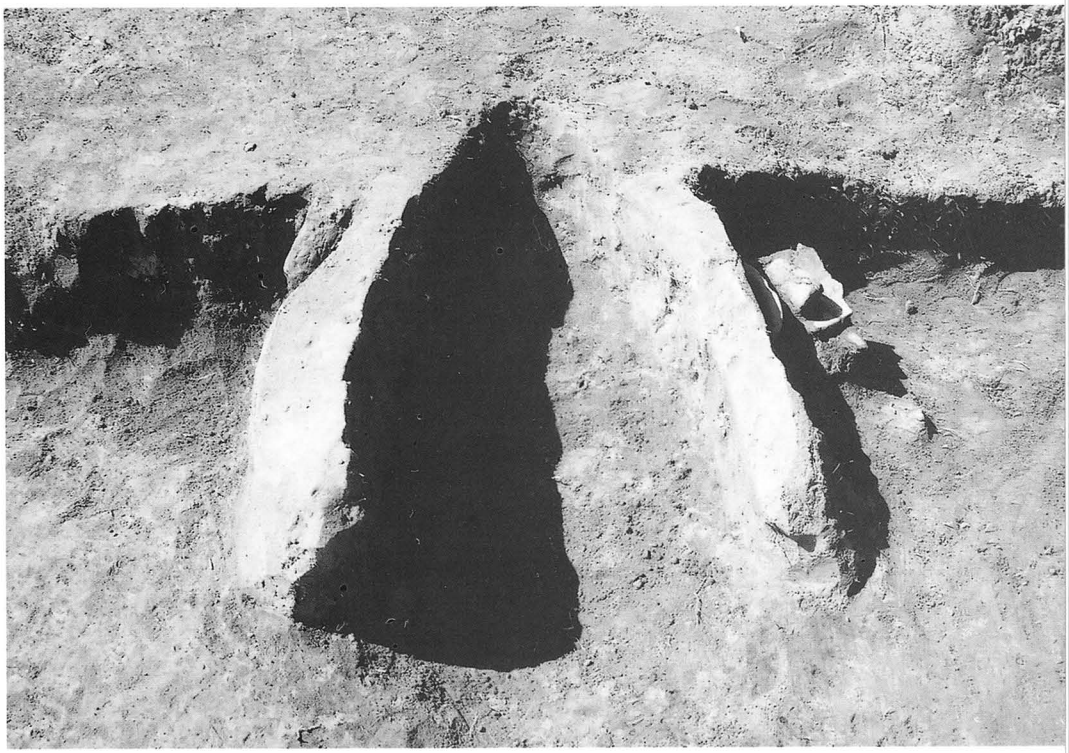
住居跡SI04カマド

住居跡SI05全景

住居跡SI05カマド

住居跡SI05出土遺物状況

住居跡SI06全景



住居跡SI06カマド

土坑SK01全景

1

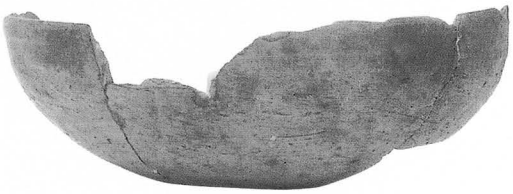
2

3

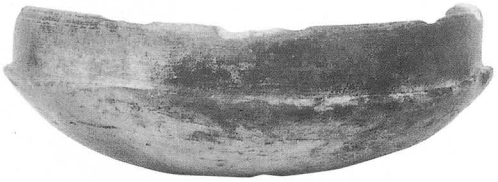
4

5

6



7



8

9

10

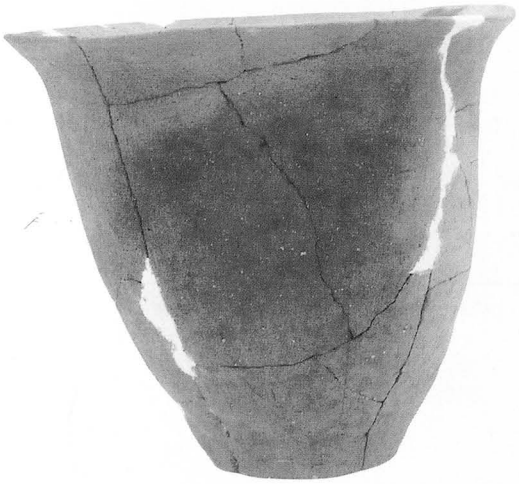
住居跡SI01（1～4）　住居跡SI02（5）　住居跡SI03（6・7）　住居跡SI04（8）　住居跡SI05（9・10）

1

2

3

4



5

6

住居跡SI05（1～5）
住居跡SI06（6）

7

8

9

10

11

12

13

住居跡SI01（7～9・11）
住居跡SI02（12）
住居跡SI06（10・13）

報告書抄録

ふりがな	ねさきいせき
書　　名	根崎遺跡
副 書 名	
巻　　次	稲敷市埋蔵文化財調査報告書第１集
シリーズ名	
編著者名	小川和博・大渕淳志
編集機関	有限会社 日考研茨城
所 在 地	〒330－0508　茨城県稲敷市佐倉3321－1　　TEL.029－892－1112
発行機関	稲敷市教育委員会
所 在 地	〒300－1492　茨城県稲敷市柴崎7427番地　　TEL.029－892－2000（代）
発行年月日	2006年3月31日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
根崎遺跡（ねさきいせき）	茨城県稲敷市蒲ヶ山字根崎1147	441	164	35度57分10秒	140度17分13秒	2005.08.01～2005.05.19	400㎡	山砂採取に伴う事前調査

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根崎遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	竪穴住居跡　６軒 屋外炉跡　１基 土坑　４基	土器（縄文土器・土師器・須恵器） 石製品（石製模造品） 土製品（土玉・支脚）	縄文時代前期末葉の屋外炉跡の検出および古墳時代中・後期の集落跡である。

根崎遺跡発掘調査報告書

平成18年(2006) 3月20日　印刷
平成18年(2006) 3月31日　発行

発　行　稲敷市教育委員会
茨城県稲敷市柴崎7427番地　TEL　029-892-2000

編　集　稲敷市教育委員会
有限会社　日考研茨城
茨城県稲敷市佐倉3321－1　TEL　029-892-1112

印　刷　有限会社　田　辺　印　刷
茨城県稲敷市佐倉3321－5